
月の王の冒険

ユマニテ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の王の冒険

【Nコード】

N2946Q

【作者名】

ユマニテ

【あらすじ】

容姿端麗、頭脳明晰な幼馴染の二人組、月の化身のような美を持つレイと太陽の化身のような美を持つラス。そんな二人はある日ゲームをしていたらゲームの中に入ってしまった。国王になったり、その護衛剣士になったり、ギルドに入ったり、狙われたり、求愛されたり？、無自覚に周囲を巻き込み巻き込まれて忙しい毎日を送る羽目に。

自分を命に代えても護ろうとするラスを護りたいと願うレイ。（願うだけじゃなく手も出しているが）

ハイエルフと竜族の少年達は何を思いどう生きてゆくのか。
剣と魔法のファンタジー

登場人物紹介（前書き）

設定ってこんなに情報が膨大になるんですね（遠い目）

登場人物紹介

世界・月の王

ヘッドギアのようなものを付けて眠ってするバーチャルリアリティーなゲーム

脳の普段使っていない部分を使用するらしいが詳細不明
日々新しいイベントがあり、時々新しい町が生まれることもある。

東西南北に大国がある

東の国セイエステリユウ

ブシなる者にこの国でのみ職業にでき、絡繰りが発達している
文明がどこかが間違った江戸時代の国
王様でなく、殿様が支配している
四季の移り変わりが一番美しい

西の国ビヤステンコ

自然豊かな大地が広がっているためか、精霊が多い
金髪碧眼の人や、やたらと横文字を使う人が多い
水、鉱山資源に富んでいる、魔石の発掘量も多い

南の国スザールスク

南国を思わせるトロピカルな国
少し三国より文明が遅れているが住民が陽気なためさほど困っていない
リゾートに訪れるプレイヤーが多い景勝の地となっている

北の国ノルデンゲンブ

冬の間は雪で閉ざされてしまっ

強いモンスターが多い

プレイヤーの間ではそこでの冬の戦闘は慣れていても苦戦すると
もっぱらの評判

他にも小国が百余りある

国同士での戦いは最近はなく、結構貿易もしているため、仲が良い
モンスターの討伐にどの国も力を入れている。

ギルドはどの国にもあり、共通のギルドランクをしている
レイとラスは東西南北の丁度真ん中にあるギルドの国のツンフトに
基本的に滞在している
多くのプレイヤーがこの国にいる

お金の単位はF「フェザー」

国生みの物語に、翔んでいた大きな鳥から抜けた羽根が陸になった
という御伽話フェアリーテイルからきている

実際にこの大陸は羽根の形をしている

10Fでパンが買える

100Fで短剣が買える、宿に泊まれる

1000Fで魔石（一番安いレベルのG）が買える

クエストレベル

SからGまで

S・大陸災害レベル・推奨レベル・S数十人ゝ

A・国家災害レベル・推奨レベル・S数人ゝS数十人

B・街災害レベル・推奨レベル・S数人・A数十名

G・採集・推奨レベル・なし

など

モンスターレベル

SからGまで

S・ドラゴン系・フェンリル・アペプ（アポピスとも）・幻獣

A・リヴァイアサン・ワイバーン・キマイラ・バジリスク・マンティコラ

B・セイレーン・ハーピー・ケルピー・スキュラ

C・トロール・オーク・ゴブリン

など

レイ・ラティィシャ・フォン・ロストセレス

本編の主人公、本名は白妙 澪（シラタエ ミオ）

鴉の濡れ羽色の肩より少し下まである髪に、黒曜石の煙るような瞳、雪のように白い肌を持つ

全校女子生徒から羨望と嫉妬の念を一身に受けている存在であるが、幼馴染からの涙ぐましい程の努力でシャツトダウンされているため、なぜクラスメイトがこつちを向いては顔を赤らめるのか分かっていない。

超絶美形だが、本人は平均より上程度の認識

冷静な性格であり、頭脳はテストや模試ではトップクラスの成績を誇る

ファンは多数いるが幼なじみの飛鳥（後述）がいるため、遠くから眺めているだけ

不用意に近づき過ぎると飛鳥とファンから袋叩きにされる

身体能力は高いが持続力は女子生徒の平均、反射神経などは抜群である

ラスや家族以外には基本敬語になる、慣れると取れる

レイの外見は澪よりも美形なのでもはや神レベル

腰下までの長髪、根元が薄い金髪で、毛先にいくにつれて銀色になる美しいグラデーションがかかっている、本編では単に銀髪と表記する

瞳の色はアメジストのような深い紫、ハイエルフは魔力の高い者ほど美しい紫になることからその内包する魔力の高さを物語っている肌の色は同じく透けるような白さをもつ

身長は、零、レイ共に172cm

体重は40kg後半

飛鳥からは太れ、太れと言われている

レイの獲物は杖、打撃にも使える優れものののだが、主にラスを殴っている

アスクレピオスの杖など、ラビリンスツールボックス迷宮道具箱内に数百種類保有

何故か多数ラスの物が入っているときがある

レベル839

種族 ハイエルフ、日本国内ではレイのみ。

ギルドランクS

固有スキル 《ロイヤル王族》、エルフなどからの魔法攻撃を受けない、《チャーム魅了》、笑顔に魅了効果があり、不意打ちはどきつとする、《フィールド領域》、森などの自然豊かな場所では攻撃力などが2倍になる

職業 オペロン妖精王

魔法攻撃力が3倍になる、また、受ける攻撃を半減。これ以上無いほどのレアな職業。

無条件で精霊を使役できる

副業 交渉人や鑑定士、調教師、料理人など

得意な魔法はスピリットマジック精霊魔法やクリエイトマジック創造魔法

レイを神として祀っている宗教ができているらしいが正否は明らかでない、が、もし知られたらまず間違いなく飛鳥により跡形もなく

消されるだろう

家族は父、母、シャム猫のルクスがいる
家族仲は極めて良好

ラースフル・ドリュエンス・ハイエンド
本名は竜神 飛鳥（リュウジン アスカ）

漑には劣るが竜族に選ばれるだけあって野性的な美形
容姿は、飛鳥のときは漆黒の肩の少し上までの少し逆立った髪
どこか野性の獣を思わせる赤み掛かった瞳をしている、肌の色は少
し日に焼けていて健康的

漑より頭脳は少し下あたりの中々の秀才
スポーツは野球部やらサッカー部やら引つ張りだのだが、本人は漑
以外見えていないため無視

スポーツ万能、容姿端麗、頭脳明晰と揃っているが、皆、漑にべつ
たりなのを知っているため恋愛対象から除外されている、稀に容姿
に自信のある者が告白しては存在否定されているらしい
中学校入学まで漑が女の子だと思っていた。

一時期悩んだが、漑の母親に「漑を幸せにしてくれるならお嫁にあ
げるわ」と言われ、ま、漑だし、性別なんて些細なもんだ。とあっ
さり解決

初恋は漑、しかも継続中

目下の夢は漑の父親に結婚を願わせること
でも、別に、漑の一番でいいだけ、結婚が一番手っ取り早く、か
つ、周りに強くアピールできるから言ってる
あくまで、恋情は漑に対する愛情の一欠片
漑のためならたとえ火の中水の中を地でいく

ラスの容姿は、燃え盛る炎を思わせる焰色の赤髪
深い海の水底のような蒼色の蒼瞳

肌の色は竜族特有の浅黒い茶褐色の肌をしていて頑丈

飛鳥もラスも身長は同じ179cm

体重は筋肉の量の差か飛鳥は62kg、ラスは65kg

獲物はドラゴンの鱗とオリハルコンで鍛えた大剣、投てき用ナイフも数本保持している

レベル845

種族 竜族

ギルドランクS

固有スキル 《威嚇》^{スレット}、対象を怯ませる、《搜索》^{サーチ}、自分のレベル

×3mの範囲の気配を探ることができる、ただし自分より上のレベルは無理、《竜の加護》^{ドラゴングレイス}、エルフとハイエルフ以外に与えるダメージ

ジを2倍にする

職業 ^{ホーリーフェンサー} 護聖剣士

竜族のみなれる職業で、エルフかハイエルフを守るためのもの、護衛対象を守る場合には攻撃力が二倍になる

^{ワイルドアニマルトレーナー} 副業 猛獣遣い、料理人、筆記師

^{ワイルドアニマルトレーナー} 猛獣遣いは10頭以上倒したモンスターを召喚し、使役出来る、ただし一度に喚べるのは合計が自分のレベルの2倍で、10頭までになっている

ライカ・ヒュノメ・ロックウエル

本名は不明

容姿は、栗色の髪に、青空を溶かしこんだような青い瞳

身長185cm以上、体重80kg以上の大柄な身体をしている
密かにレイがその筋肉に憧れている

二十代前半

元の容姿を期待できそうな美形

気さくな性格で、ラスとも仲良くなる猛者

獲物はレイの身長よりも大きな斧、推定175cmほど

レベルは不明だが推定レベル720前後

種族は人間

ギルドランクA

固有スキルは不明

職業 ファイター 戦士

普段は攻撃力が1.5倍だが、追い込まれてピンチになると暴走し、

ベルセルク 狂戦士になる

ベルセルク 狂戦士になると攻撃力が3倍、ただし、理性がなくなり、命中率が

下がる

副業 インフォメーションナー 情報屋

住民から耳寄りな情報や噂話を教えて貰える

設定上では直ぐに消えるキャラクターだったが、知らぬ間に出張ってきていた暴走キャラ

どうしようか思案中

トリップしてからの国・人・物

セレス国

北西にある大国、世界一といっても過言ではない。

鉱物資源、食物資源、観光資源、が潤沢のほぼ完璧な国。

国王不在のため出生率低下中、理由は王の役割の一つにある。

エルフ族、竜族が上層部を治めているが人も多い、むしろ人が一番多い。

エルフ族は温和な性質のため、セレス国の人族からは天使族と呼ばれることも。

国民は王を百年以上待ち望んでいる。

グリムリ国は悩みの種。

グリムリ国

南東にある世界第三位の国

海洋資源が豊富なほかはまあまあ、でも東西南北よりはある。

国王が老害で政治が滅茶苦茶に、セレス国を攻めさせようとしているらしいが、ぶっちゃけそれどころじゃない。

ダークエルフ族が治め、魔族がそれに従う形式、魔族が大半を占めている。

国王がセレス国に異常なまでに執着するのは呪いの影響かもしれない。

イリスシュタイン

虹晶

持った者の魔力保持量を測る魔石の一種、とても硬く、ダイヤモンドでやっと削れるくらい。

一気に魔力を注ぐと割れる・・・らしい

巨大で球体のものは虹球と呼ばれ各国に置かれている。

魔石

魔力を溜めたり、日常生活に使ったり、用途はさまざま。

セレス国でよくとれる、王城内の深奥部で取れるものは桁違いだとか、噂があるが誰もいけない、行けるのは王と王の認めた者だけ。

リヤステイナード・????

茶色と赤色の中間色のような髪に、オレンジの瞳を持つ青年(?)。
レベル 推定600前後と思われる

種族 エルフ

天才と何とかは紙一重を地でいく人。多分天才。

本人曰く学者、他人曰く魔術師。

魔力が高い、のに変なことにしか使わない。気が付いたら変な物を

造り出している。

学者兼魔術師兼変人。

フォイボス王の幼馴染だった。

実は結構なお年、でも歳がいくつか誰も知らない。むしろ本人も覚えていない、真実は闇の中。

昔使われていたらしい言葉を使う。大阪弁に近い、かもしれない。

ガリオス・デラン・エルゲスト

浅黒い肌に褐色の髪、闇色の瞳をし、腰には業物と思われる剣を差している。

古風な言い回しをする見た目二十代の青年

レベル 推定620前後

種族 ダークエルフ

和平の使者としてセレス国に向かう

登場人物紹介（後書き）

まだまだ書き足します

残り少ない時を過ごせ（前書き）

少し書き直しました。
感想待ってます。

残り少ない時を過ごせ

『なんでこうなったんだ…』

杖の一振りで辺り一面を氷の世界にし、相手を恐怖に陥れながらレイこと、レイ・ラティーシャ・フォン・ロストセレス、は不満そうに呟き、画家がいれば即座にその足元にひれ伏し、絵に描かせてくれとたのむような顔をしかめた。

レイは現実^{リアル}でもその美貌から、力仕事をしたことがなかった。

別段、レイは病弱というわけでもなかったのだが、日本人にしては白過ぎる肌が彼をより儚いものに見せた。

そして、幼なじみがまるで恋人のように扱い、力仕事をさようとせず、溺愛したため、自然と周りの高校のクラスメイト達も大切に扱った。

レイ自身は家事洗濯から何まで自分で出来たので嫌がったのだが、家事がまったくできない幼なじみのために弁当を作っていたのでそれであいこになると割り切った。

もっとも、学校では公認カップルとみられていたが

レイ自身にはそんなつもりはない。

幼なじみの行為は物心つくころからのことだったので疑問におもっていないのだ。

そのためだろうか、レイは体を動かすことに興味を持ち、月の王という人気のゲームに興味を出した。

月の王とは、主に日本を中心とした世界中でプレイされているファンタジーな剣と魔法のバーチャルリアリティなゲームで、日々更新されている。

レベルは上限なしなのだが、1000以下は新人プレイヤー、400で平均、650で上級者といわれる。

とはいっても、そのレベルは徐々に上がってきているそうだが。

職業は100以上、副業もある、
呪文や技術は3000を超えたらしい。
レベル スキル

だが、それすらも彩りを加えるだけでしかない。
よりゲームの質を上げ、面白みを深めているのは種族とその選び方の奇抜さにある。

最も多い種族は四割を占める人間、次いでドワーフや魔人、ヴァンパイア、その他にも二十種ほどを普通種と呼ぶ。
そして稀少種に竜族とエルフがあり、よりすくないのがハイエルフである。

何故竜族やエルフ、ハイエルフがすくないのか

まず、ゲームを始める時にチュートリアルで自分の顔や身体をベースに、少し美化されたキャラクターを数体ほど作られる。

その時に自分の顔立ちや骨格にあった種族を十種類ほどのの中から選ぶことができる。

そして、その中でも容貌が格好いい者は竜族、美しい者はエルフが選択肢に加えられる。

どちらも基礎能力が普通種とは前者は体力や物理攻撃力が、前者は魔力や魔力攻撃力が比べられないほど秀でているので選択肢に現れた場合、基本的に皆はそちらのほうを選ぶ。

しかし、二つとは違い、ハイエルフの場合は強制的に選ばされる

ハイエルフは傾国の、と形容されるような、エルフになる者よりも圧倒的な美貌をもつ者になる。

ハイエルフはエルフの王族、という意味があるため、エルフよりも

美しくなければならぬのだ。

そうなる**と必然的に数が絞られてしまうために、強制なのである。**

竜族には負けるが普通種よりも体力、攻撃力があり、魔力、呪文習得速度スベルに関しては他の追隨を許さない。

レベル10のハイエルフとレベル200のエルフがまったく同じ、エクスプロージョンスベル

《爆発》の呪文を唱えたとしてもハイエルフの方が強力な破壊力をもつ

更にエルフの攻撃はハイエルフには効果がない、

などの恩恵がある一方、NPCを使ったイベントがある時に、事前に知らせがあるが、

強制的にイベントのために利用されることがあつたりする。

レイは自分がどうやら人から美人と言われているらしいと知っていたので、竜族やエルフが選択肢にできるかもしれないが、無難にすべてのパラメーターが平均の人間にしようと思っていた。

3ヶ月ほど先に月の王を始めていた幼なじみの飛鳥、月の王での名をラス、ラースフル・ドリュエンス・ハイエンド（月の王での名前は始めの名だけを自分で決め、後の名は勝手に決められる）が竜族であつたので安心していたのだ。

ラスは

「人間に決められるといいがな。」

と苦笑いしていたが、蓋を開けてみれば選択肢はハイエルフの一つだけ

まさかのことにレイがショックで固まっているうちに、隣にいたラスによって決定され、二年後の今に至る。

竜族とハイエルフのコンビは最強で、二人はメキメキとレベルを上

げ、レイは838、ラスは845となり、ギルドランクは二人ともSである（ギルドランクはSからGまでの8段階ある）

二人は名実共にトップレベルの実力を持っている。

今回も、ランクAのモンスター数十体の討伐の依頼をしているところだ。

『吹雪け、凍れ、樹氷となって永久に眠れ！
フリージングナイトメア
《凍結悪夢》！』

ゴオオオー！

轟音と共に目の前にいた十数体のモンスターは凍り、やがて光となつてお金とアイテムを残して消えた。

呪文^{スベル}を唱えている間中レイを守っていたラスは息を吐いて剣を収めた。

「さっすが、レイ！

一発だったな、愛してるぜ！

ん？ レベルがあがってるぞ、よかったな！」

レイははしゃいでいるラスを尻目に辺りを窺い、モンスターがもういないのを確認して落ちていたアイテムを拾い集め、

『よし、帰ろうラス』

ラスの言葉は無視した。

「レイ？ 返事は？ レイ？」

期待したような目で見てくるラスに対し、
レイはおもむろにステータス画面を見て

『ああ、本当だ、レベルが上がってる。』

と答えた、がラスは手を振り回して

「ちっがーう！

いや、あつてるけど、

あつてるけど、そうじゃなくて、俺も愛してるよ、とかさ」

レイはそんなラスを見ながら

『私もラスを愛してるよ。

これでいいか？』

と見事な棒読みで応えた。

残り少ない時を過ごせ（後書き）

始まりました！

レイとラスの改進黨劇！

鬼が出るか蛇が出るか、抱腹絶倒、
どうか月の王の冒険を、
囂に！
呵呵大笑、笑う門には福来る。

不穏な空気を嗅ぎ付ける（前書き）

ライカ発生！

不穏な空気を嗅ぎ付ける

「Sなレイもツンデレなレイも好きだー」

と叫んでいるラスを杖で殴つ、ゴホンッ！ 訂正、無視して、
レイはギルドに帰還した。

『これを換金してください。』

結局ラスがレイと合流したのは、ギルドでレイが報告をして、報酬を待っているときだった。

ラスはレイに殴られ、しばらくの間気絶していた。

「レイ、幾らになった？」

燃え盛る炎のような髪を振り乱しながらレイに駆け寄って来たラスを見て、

こいつ、忠犬か？ と思ったそうな

『今、換算しているところだ。』

呆れた、ラス、お前まだ怪我を治してなかったのか？
今治すから動くなよ。』

怪我を治しもせず^{リカバリーマジック}に帰ってきたラスに呆れ、嘆息しながらレイは手をかざし、回復魔法を使う。

『彼の者に癒しを与えよ、《^{ファーストエイド}応急手当》』

ポワア

別に詠唱しなくてもいいのだが、気分でレイは詠唱する。

基本、レイは上級魔法以上の呪文スベルでも詠唱を必要としないがそこはレイの、詠唱したほうがらしいでしょ、という初級者の詠唱が長い者からしたら刺されそうな理由だったりする。

レイの掌から光の粉が溢れ、ラスの傷ついた箇所を治してゆく。

この呪文は低位回復魔法で、対象のHPの四分の一を回復する呪文スベルである。

どんな種族でもレベル20以上で取得出来る基本魔法で、エルフやハイエルフなどの魔力特化型は最初から使えるということなどから便利な呪文スベルと人気があり、重宝されている。

ランクAのクエストを請けたにしては四分の一しかHPが減っていないところから二人の有能性がわかる。

はあ、怪我ぐらいささと治してから帰って来い。

いやー、レイに治してもらいたくて。

などとレイとラスが雑談していると

「よっ！

レイー！ラスー久しぶり。今日もレイは綺麗だし、ラスはレイに甘々だな！

で、だ。

おまえら、どんなクエストを請けてきたんだ？」

ラスの肩を叩き、レイの銀系のような髪を撫で、二人の友人であるライカ、ライカ・ヒュノメ・ロックウエルがギルドにたむろしている人ごみを掻き分けてきて、話しかける。

185cmを超える偉丈夫であり、レイの身長を超える獲物の斧を背負っている。

種族は人間、ギルドランクはA

栗色の髪に青空を溶かし込んだような瞳をしている。

レイとラスはライカの飾らない態度が気に入っている。

レイは至高のアメジストのような瞳を瞬き、ライカの方を向き

『ああ、ライカ、お久しぶりです。お元気そうですね。私たちは北のノルデングェンブ国周辺に出没しているオークとトロールの群れ、およびそのボスを殲滅するランクAのクエストをしてきたところです。』

ライカは大仰に驚いてみせ、レイとラスがあまり疲れてなさそうなので肩をすくめた。

二人は基本、非常識な存在である。

普通なら、もっと沢山の人が必要なクエストなはずだ。

こいつら、ありえねえ…

「そうかい、そうかい、それは面倒だったな。しかし、それにしても、また北か。」

顎に手を当て唸る。

ラスはその言葉に疑問を持ち、ライカに訊ねた。

「北で何かあったのか？」

ライカは意外そうにラスを見た。

「知らないのか？」

後になって思えばこれが始まりだった・・・

不埒な者に断罪を下せ（前書き）

ライカ暴走継続中

不埒な者に断罪を下せ

ひとまず三人は話をする前に報酬を受け取ることにし、ライカに先に宿で待つてもらおう事にした。

ライカは自分も待つと言ったが、なにぶんギルドの建物の中は人であふれていたため、渋々宿に向かって行った。

ギルドの受付にレイとラスが行くと、丁度作業が終わったところだった。

「レイ様、ラースフル様

クエストの完了が確認されました。

報酬はオークが24頭、トロールが16頭の計40頭

そして群れを率いていたバジリスクが1頭

オークが1頭550F、トロールが1頭1100F、バジリスクが7500F

となりますので、オーク13200F

トロール17600F

合計38300Fとなります。

こちらがそのお金になります。」

お疲れ様でした。

硬貨の入った袋を渡し、深々と頭を下げる職員に見送られながらレイとラスはライカの待つ宿に急ぐ

「しかし、毎度思うけど、NPCってのはなんであんなに敬語で

礼儀正しいのかな

こう、背中が痒くなるっていうか、なんというか。」

ラスは顔をしかめ、誰ともなしに呟くと

『プレイヤーと区別をつけやすくするためか、単にプログラミングが簡単なんじゃないか？』

意外にもレイが返答する。

ラスは成る程と頷き

「確かに、皆の口調が違うようにするのは色々大変だもんな
流石俺のレ……バキッ！」

最後まで言わずことなく、レイはラスを見もせず杖で殴る。
ラスに学習能力はないのだろうか。

『アホか、誰が俺のだ、誰が。』

レイの目は既に冷たい光を帯びている

「いてて、レイ、ゴメンって
機嫌直してください」

全く痛そうにせずラスは謝る。

レイの機嫌を取るのに必死だ。

レイは力をそれなりに込めて殴ったのだが、やはり竜族だけあつて頑丈だ。

まったくもって種族能力の無駄である

『ふう、もういい。』

つと、たしかこの宿だったか？』

レイは宿の外見を見てラスに確認を取る

「ああ、ここで間違い無いはずだ。」

ラスは当たり前のようにレイの為にドアを開きレイが先に入るのを待つ、

レイも慣れたように先にくぐり、宿の受付にライカのことを尋ねる。

『ライカというが来ていませんか？』

受付はレイとラスを見て

「レイ様とラスフル様ですね。」

ライカ様は二階の左から四つ目の部屋でお待ちです。」

二人は階段を登りながら、ライカのことを考えていた。

『ライカは北について何を言おうとしていたんだろう？』

ライカは確か副業が情報屋スキルだったよな、

だったら情報を集める技術で何か掴んだのだろうか。』

レイは不安と期待の入り乱れる感情を隠しきれずに目を輝かせながらラスを見上げた。

ラスはあ、その顔可愛い、

とレイに知られたらまた杖で殴られるようなことを内心思いながら、

そんなそぶりも見せず。

「もしかしたらそうなのかもしれない。

モンスターも増えているらしいし、

新しい町や国、ダンジョンができたんだったらすぐに行こうぜ!」

ラスは返しながら、またドアをレイの為に開けたのだった。

不可思議な話の正体を掴め（前書き）

ライカの暴走を誰か止めてください！
↑ オイ

不可思議な話の正体を掴め

キィ……パタン

「おお、やつときたか。」

ラスがドアを開けて入ると、ライカがイスに座ってくつろいでいたのんきなものである。

「まあ、とりあえずその辺に適当に座ってくれ。」

ライカは立ち上がり、

部屋に置かれていた紅茶のような飲み物を新たに2人分淹れ、テーブルの上に置いた。

テーブルを囲うように置かれているイスの1つに座ると、ラスに自分の前の2つのイスを交互に指差し、次いで、笑いながら左隣のイスをぽんつと叩いた。

「レイはこっちで。」

レイが言われるまま素直にライカの隣に座ろうとすると、ラスがレイの腕を掴んで引きとどめ、

ライカの正面に座り、レイを自分の隣に座らせた。

『ラス、どうかしたのか?』

ラスはレイの疑問に答えずに、無言のままレイをじっと見詰めながら口を開いた。

「レイ、ああゆうのは無視していいんだ。

いや、しなさい。

ああいう好色スケベなのは無視してないとヤバイことになるからな？」

レイはそういうものなのかと納得し、言われた通りラスを無視した。
ラスは

え？ 俺？ 無視するの俺なの？ ライカじゃなくて？

レイ？ ちょっと、レイさん？ おいコラ、ライカ！ 無視するな。

と慌てていたが、ラスはいない（設定）ので、レイとライカ（ああゆうの扱いされたので密かに怒っていたらしい）は反応しない。ついにラスがイスの上でレイに向かって泣きながら土下座し始めたのでレイは渋々ライカに頷くと、満足したのかライカは話し始めた。

「さてと、

いきなりの話だが、ギルドのクエスト受注のボードを見たか？

少し前から段々と北の国の辺りのクエストが増えてきていたんだが、すっかり今では五分の一のクエストが北の国に関するものばかりが貼られているんだ。

北で近々何か大きなイベントがあるかもしれない。

住民たちが噂しているのさ、北の国の森がおかしいってな」

レイとラスはその情報に顔を見合わせ、考え込んだ。

モンスターが増加しているとは、はたして鬼が出るか、蛇が出るか

「ただ……」

ライカは何か言いよんだ。

レイは中空に向けていた視線を戻し、柳眉を潜めて、訝しげに訊い

た。

『どうしたんですか？』

ライカは頭を振ると、諦めたかのように言い出した。

「実のことを言うとな、勿論、少し変わったただけのイベントなのかもしれない。

ただ、情報が少なすぎてあまり分かっていないことなんだけど、今回の異変はどこかおかしいんだよ。

住民たちは皆NPCだが、噂話に関しては、結構人間的になるようにプログラムされているのは有名だから知っているだろう？

だから分かったんだが、珍しく住民たちが本気で困惑を表してしているんだ。

こっちはあまり知られてないが、住民はバグには困惑を表すように設定されているからな。」

だからもしかしたら厄介なバグかもしれない。

そう言うライカにラスが突っ込む

「可笑的いだろ。そんな騒ぎになるようなデカいバグを放っておくか？

いくらなんでも誰か、たとえば月の王のプログラマーたちが何か処置するだろう。」

あいつら優秀だし、レイはどう思う？

考え込み、黙ったままのレイに訊ねた。

レイは考えを纏めたのか、

テーブルの上のコズカというお茶に似た木からできた紅茶を一口飲み、口を湿らせてから口を開いた。

『今の段階では、まだはつきりとしたことは言えないが、いつものイベントかは、住民の本気の困惑のことがあるから、多分違うだろうし、

バグだったとしたら、今までプログラマーに直されていないことから、相当深刻なものなのかもしれない。

どちらにしても、相当やっかいなものになるだろうな。』

ラスとライカは話が重くなり始めたことにげんりとなる。

ラスは空気を軽くするために努めて明るく言った。

「じゃあ、レイ、俺たちで異変のあったところにも行ってみようぜ。

何か分かるかもしれない。」

ライカがどうするんだ？ とレイを見ると、

レイも行ってみたかったのか、すぐに返事をした。

『そう、だな。

情報も少ないし、私たちなら何か出てきてもそうそう遅れを取ることも無いだろう。

今日はもう時間が無いから一旦終了して、明日にでも行こう。』

明日の夜10時に月の王を始めよう。

ライカは2人を交互に見た。

2人共行く気満々のようなので、少しでも役に立てばと情報を教える。

「一番、異変が多いのは北の国より少し西にあるセレスの森だそうだ。

俺も北の国の首都にちょっと用事があるから途中まで一緒に行くよ。

「

セレスの森と言ったとき、一瞬レイの紅茶を飲んでいる手が止まった。

『セレス…』

じゃあ、俺、先に終了するな。

おつかれー、とラスが月の王から去った。

ライカが先ほどのレイの動揺に気付き、声をかけようとするが

『それでは、ライカ、明日の夜10時に街の砦の門のところで待ち合わせしよう。』

また明日に、とレイが先に消えてしまった。

後には残されたライカが残っているのみだった。

情報を整理し計画を立てる（前書き）

やっと書き上げました。

情報を整理し計画を立てる

運命の刻まで、残りあと1日と半日

レイとラスはライカとの約束の時間よりも少し前に月の王に入っていつも泊まっている宿屋の部屋で落ち合い、旅の準備をしていた。二人とも、熱心なことである。

「たしか、勉強とか、やっておくことを終わらせてからこれ始めたのが10時ちよつと前ぐらい、だったよな。

明日は学校があるから6時に起きるとすると、

8時間×15は120時間で、月の王の1日は30時間だから、丁度最大4日間、月の王をプレイしてられるな。

レイ足りないものあるか？」

あるならすぐ行つてに買つてくるぞ。

イスにもたれかかつて、ステータスや装備を確認しつつ、

ラスはベッドの上でうつ伏せに寝転がったままの体勢で地図を覗き込み、

手で国名をなぞって確認しながらブツブツと真剣になにやらルート
の計画を練っているレイに声をかけた。

少し慣れないとこの状態のレイには話しかけづらい。

「うん、武器も全て新品同様に手入れた。

前に使った消耗品は既にストックが一杯になるまで買っておいたし、
食料も同様に腐らないように《タイムストップ時間停止》の呪文スベルを掛けて道具箱に
放り込んでおいたから、他には多分無いはずだから大丈夫だと思う。

」

これも大丈夫、あれも大丈夫っと

レイはうつ伏せのままの姿勢で地図から顔を上げて、器用にラスを見上げつつ、1つ1つ指を折って答える。

ラスはそんなレイのどこか幼い仕草に動揺して、訳もなく手を上げたり下げたりした。

「？、何やってるんだ？

それは手信号か何かか？」

ラスが手をパタパタとさせるのを見て笑う。

ラスはレイが笑顔なので、魅了^{チャーム}の効果のためだけでなく、なんとなく心がほんわりと温まるのを感じた。

それから半時間ほどしてから二人は宿屋を出て、城門に向かった。

「いたいた、レイ！ラス！ここだ。」

街をぐるりと囲っている砦の北門の所で二人はライカと合流した。

「それで、どういうルートでセレスの森まで行くか決まっているのか？」

歩きながらライカはレイに、お前ならバツチリ予定を立てているんだろう、といった表情で問いかける。ラスはそのことに釈然としな
い思いを抱きつつ、事実ルートをレイに任せて自分は何も考えていなかった^{なかつた}ので無言を貫いた。

そんな隣にいるラスのいじけたような雰囲気をなんとなく感じ取り

ながら、

レイは二人に説明するために口を開いた。

『はい、だいたいの予定は先ほど地図で確認しながら立てておきました。

まず、私たちはこのままこのノルデンゲンブ国に向かう道を行きます。

日が暮れるまでには、主に休憩地として発展している小国セレティア国に着くはずです。

そこで宿泊し、翌朝にライカと別れてセレスの森の近くまではラスに飛行系モンスターを喚んでもらって一気に行こうと思っています。後は、終わり次第ツンフト国に戻るか、それともライカを追ってノルデンゲンブ国で合流するかはまだ決まっていますませんが、

ライカの用事は時間が掛かりそうですか？』

ライカは用事の内容を思い出しながら時間がどのくらい掛かるか計算する。

「あー、セレティア国から首都のノルドレインに行くまでだいたい半日だろ。

で、用事が1日くらい、帰ってくるのも含めたら4日間だからさすがに話す暇も無いわな。

悪いけど、終わったらノルドレインに来てくれるか？」

申し訳なさそうに、しかし情報屋としての好奇心が疼くのかライカは手を合わせて頼む。

レイとしてはどちらでもかまわなかったので、ラスを見やる。

今まで辺りを《サーチ搜索》して、モンスターがいらないか警戒しながら、二人の話を何気なく聞いていたラスは話をいきなり振られて驚く。

「俺が決めるのか？」

「そうだな、じゃあ情報交換もしたいし、ライカを追おう。」

レイ、いいか？

決めておきながらレイに伺いを立てるラスに、ライカは相変わらずレイ至上主義者だと笑いを堪えた。

『良いに決まっているだろう。』

それに、この頃は身体が鈍ってきたような気がするんだ。

終わってから北の強いモンスターの巣窟だと名高い山に登って、戦って、最低でもレベルを5は上げよう。』

ふふふっ

どうやらレイはノルデングンブ国周辺の強いモンスターと戦うつもりのようだ。前にその辺りで戦ったことを思い出したのか、微笑んでいる。

心なしかライカの腕に鳥肌が立つ。気温が下がってきたようだ。

「いいな、それ。」

久しぶりに強敵か。俺の腕が鳴るぜ！」

ぬあー！

ラスが吠える。

レイが見た者を恐怖に陥れながらも目の離せない求心力のある笑みを浮かべ、

ラスが久々の強敵と戦える予感に興奮を押さえ切れずに吠える混沌^{カオス}にライカは心配をする。

「山がぶっ飛ばされて跡形も無くなってたらどうしよう。」

この、戦闘^{バトル}狂たちめ、戦闘^{バトル}狂のオレよりも戦闘好きなのはどんなん

だ。

山が無くなったら修復させるプログラマーたちに罪悪感が出てきそうだな、原因作ったのオレ……だよな。」

山の心配を。

どうやらライカは二人の心配などこれっぽっちもしていないようだ。二人がようやく普通の状態まで落ち着いたのはお昼を食べ終わった頃だった。

『あと半分と少しぐらいでセレティア国に着きますよ。
ところでライカ、大丈夫ですか？
顔が疲れたようにしてますよ。』

興奮冷めやらない二人が、モンスターが出現するたびにそのモンスターには過ぎた剣技や上級魔法^{アッパーマジック}を連発したため、止めるのに奮走したからだ。

ライカは体力面^{ライフ}ではほとんど疲れていないが、精神面^{メンタル}ではげっそりしていた。

しかしそこは上級者、気持ちを切り替えてすぐに回復した。

『では、出発しましょうか。』

情報を整理し計画を立てる（後書き）

次には森に着きたいですね。

酔いし者から切り抜ける（前書き）

平日はノートに書き溜めすることにしました。

酔いし者から切り抜ける

そのあとは特に何事もなく、セレティア国に着いた。街に入ってすぐに宿をとり、荷物を置いて身軽になった三人は街へと繰り出す。

モグモグ、あ、これうまいな

「ライカは何の用事でノルドレインに行くんだ？」

ライカが住民から聞いた美味しいと評判の店で夕食に舌鼓を打ちながら、ラスは切り出した。

「ラス！」

野暮なことを聞くんじゃないよ。」

レイは何を想像したのか、頬を染めながらラスをたしなめた。

「レイ、何を勘違いしているのか知らないが、オレはギルドの仲間に会いに行くだけだ。」

何を想像してたのかな？

ん？ おにーさんに言ってみな。

ライカは赤く染まったレイの頬を軽く摘んだ。

「え、てつきり、前に自慢していた恋人さんに会いに行くんだと思ってました。」

ノルドレインにいるんですね。」

ガン！

とたんにライカはテーブルに突っ伏した。
そして、ぼそぼそと言った。

「覚えていたのか。

実はその後、一ヶ月ぐらいで別れたんだ。

あいつ、オレが自分というより仲間というほうが生き生きして楽しそうだって言っただ。

それを聞いたら情けなくなつてよ、結局、今では元のただの仲間に戻つたつてわけだ。」

沈黙がその場を支配し、気づいたライカが話を変えた。

「そついうレイは？ 恋人とかいないのか？」

やつと収まつた頬をまた赤く染めてレイは戸惑う

「…そうですね、まだそついう人はいません。正直、ラスがいてくれるので、あまり欲しいとは思っていませんから。
今は考えられないです。」

ライカはニヤニヤと笑い、固まつたラスを見遣る。

「はあ、嬉しがっていいのか、悲しがるべきなのか、判断に苦しむな。」

ラスはレイに大切に思われていることに喜びつつ、
もし、レイに恋人ができたときに、はたして自分が冷静でいられる

か自信が無かった。

ラス、今までありがとう。この人と結婚することになったんだ。ラスも好きな人見付けろよ？

ダメだ、耐えきれない。

絶対に認めねえ！

手を握り締め、背後にほの暗い嫉妬の炎を背負ったラスに呆れた目を向けながら、ライカが腕につけた腕時計型の魔石を確認して年長者の務めを果たそうとする。

「そろそろ宿に戻るぞ。明日は早起きだからな。」

『はい。』

「了解。」

『明日は飛行系モンスターを喚んでほしいんだが、大丈夫か？』

二人部屋に泊まったレイとラスは明日のことについて話し合っていた。

「大丈夫、レイは心配しなくていい。

移動は急いだ方がいいか？」

乗り心地重視か、移動速度重視か。

数種類のモンスターを思い浮かべて問う。

『そうだな、セレスの森はここからそれほど遠くないから、乗り心地重視で。』

ただ、国が近くてどうしても人がいるだろうからあまりレベルの高

い感知されやすいモンスターはダメだ。』

レイはそう言うと、テーブルに置いていた、屋台で見付けてきた好物のザクロに似たセキルの実を絞ったジュースをグラスに注ぎ、ラスにもう1つを手渡し、くるくると回して色艶を確認してから口に含む。

『美味しい、流石自家栽培していると豪語しただけのことはある。表皮の色を見て買い溜めしておいて正解だったな。』

驚きに目を瞠らせ、己の選択に安堵する。

セキルのジュースの真っ赤な色がレイの銀の髪によく映えていた。

うわぁ、レイ、綺麗だなぁ。

ラスはレイに見惚れながら明日乗るモンスターを決めた。

ロウソクの灯りにユラユラと部屋の中を照らされ、二人の影が不規則に踊る。

他にも細々としたことを話し合いながら、二人の夜は更けていった。

聖なる神獣を乗りこなせ

運命の日まで、あと半日

チチチ、チュンチュン。

窓から朝日が差し込み、鳥形のモンスターが朝の訪れを告げている。

「…レイ、どこだ？」

『ここだ。』

レイはすでに起きていたのか食堂から持ってきた二人分の朝食を器用に持ち、ドアを開け入ってきた。

ラスはすぐに着替え、レイの手伝いをすべくテーブルの上に置いていた地図や小物を道具箱トールボックス

の中に素早く直していく。空いたスペースにレイが朝食と新鮮なセキルのジュースを置き、早めの朝食を食べた。

「それじゃあ、オレはこのままノルドレインに行くから、後でまた会おう。」

絶対来いよー！

叫びながらライカはノルドレインへの道を遠ざかっていった。

「レイ、モンスターを喚んでいいか？」

レイは杖を取り出し、ラスに向ける。

「な、何？」

『ハア、アホか、こんな国の近くで喚んだら騒ぎになるだろうが。一時間ほど向こうに行ったところにひらけた場所があるそうだ。そこで喚ぶぞ。』

ラスは頭を庇っている。どうやら条件反射のようだ。

道に行く人々は北の国の服装や袴を穿いた東の国の人など、実に多様である。

レイもラスも有名なので顔が売れているためか話しかける人も多い。

「おお、レイ殿、ラス殿、拙者は肘笠と申す者。以後お見知りおきを。」

「ラスさん！ あなたと勝負を……」

「レイ様！ サインください……」

多い。

それも一時間も森の方へ歩けば人もまばらになり、遂には途切れた。

『ここなら、人もいないし、喚んでいいぞ。』

ラスは剣を抜き、地面と水平に構えた。

「……スウ、……ハア……よし」

ラスの集中力が高まってゆくに連れ、合わさるように周りの木々がザワザワとざわめく。しかしレイは微動だにせず静かにレイを見続ける。

「我に倒され、服従を誓いしものどもよ。」

我の言葉に耳を傾け、速やかに契約に従い、この場へ顕現せよ。」

ラスが紡ぐ言葉一つ一つに魔力が宿り、辺りに満ちてゆく。

やがていつの間にか地面に現れていた光り輝く魔方阵から出てきたモンスターは喚び出したラスではなく、なぜか傍観していたレイに擦り寄った。

「……ん？」

セレナータ、またか、お前まだラスのこと嫌いなのか。」

ユニコーンであるお前が男嫌いなのは分かるが私も男なんだが、と言うレイに

レイは別なのー、とばかりにセレナータと呼ばれたユニコーンは鼻先を寄せつつ、ラスを牽制する姿はとても清浄な生き物には見えない。

実はこのユニコーン、セレナータは意外と古い付き合いである。

月の王を始めてから半年ほどして、とあるイベントにレイがハイエルフとして巻き込まれたときに、報酬としてラスが受け取った召喚用モンスターである。通常ユニコーンは深淵の森に棲み、めったに目撃されない。

ユニコーンという種族は一般的に処女を好み、その膝で眠ることで知られている。

セレナータもその例に漏れず、男であるラスを毛嫌いしているが、レイになついているところを見るに、ハイエルフには男女の性差があまり無いのかもしれない。

どういう訳にせよ、セレナータはいつも主であるラスを背中に乗せるのを嫌がっているのだが。

『セレナータ、ラスを乗せてあげてくれないか。お前が嫌なのは分かっているがラスにもきつと考えがあつてのことなんだ。』

レイはセレナータに乗り、目の前にある豊かなたてがみを撫でつつ懇願する。

セレナータはラスに鼻息を吹きかけてから了承の意を伝えた。

レイの後ろに跨り、手綱を持ったラスは出発するように指示を出した。

『それで？ 結局何の意図があつたんだ？』

風を切つて飛ぶ翼の音に負けないように声を張り上げながらレイは問う。

実はこのセレナータ、飛ぶときにはペガサスのような羽を広げる、開発者曰く、手っ取り早くユニコーンとペガサスを混ぜてみたとのこと。

ラスはわずかに逡巡したのち

「べ、別に意味は無いよ。一番害が無さそうに見えるのを選んで…はい！ 白状します！

ただ単に一番レイに似合うと思いました。」

ラスは途中からのレイの冷たい視線に耐え切れず、すぐに自白してしまった。

「だってレイとユニコーンだけ、絵になると思つたんだよ、セレナータの種族を無視した腹黒さを除けばさ。

“一角獣を連れた貴婦人” みたいなかんじで。」

そう言うラスに注がれるレイの視線の冷たさはいや増すばかりだった。

馴染んだ世界と別れを告げる（前書き）

今回はどうしても短くなってしまいました。

馴染んだ世界と別れを告げる

そんな空の旅も二、三時間もすれば目的地に着く。

森から百メートルほど離れた場所に下ろされた二人はセレナータを戻し、昼食を食べながら作戦を練る。

「この辺りから見ても特に異変は見受けられないな。しいて言えば、モンスターが多いような気がするが、どうする？」

スキル
クレアウオイアンス
技術、《千里眼》を駆使して辺りを窺ってみるレイだがめぼしい発見はないようだ。

『しかたない。このまま森に入ってみよう。』

ラスは《搜索^{サーチ}》を使って探査し、レイは木々の声に耳を傾けながら森の中に入っていくた。

それが始まりだと気づかないままに。

鬱蒼とした木立の中、ちょうど森の中心付近に来たころだろうか、他の木より一回りも二回りも圧倒的に大きな大樹が、まるで森の主のように鎮座していた。

……待つ……いた、我……が至高の……王よ……

大樹の周りに木々は無く、まるで広場のように拓けていたが、思わず跪いてしまいそんな神聖な空気が辺りを漂い、何となく声を潜めてしまう。

『多分、この木が異変の原因なんだと思う。何かを呼んでいるように感じられないか?』

レイはこの大樹から不思議な求心力を感じ、引き寄せられる気がした。

ラスは何も感じないのかしきりに首を傾げている。

「いや、オレには全く何も感じられないが。

しいて言えば、神聖な空気を感じるが、それだけだな。」捉え方の違いに戸惑う二人。

その時

ザワツ

沈黙を守っていた森が騒めきだした。

そう、沈黙を守っていた。

可笑しいと思わないだろうか、前情報と遠目で見たときにはモンスターは通常より多かった。しかし森に入ってから二人はモンスターに一匹も出会っていないのだ。

このことに二人が気付いたときにはもう遅く、退つ引きならない事態に追い込まれていた。

森はいよいよ勢いを増し、大樹だけが依然として静まり返っている。

チャキ……

「どうする、明らかに可笑しいぞ。引き返してみるか?」

いつでも剣を引き抜けるように剣の柄を握りながら用心深く辺りを見渡す。

レイはまだ大樹を見つめていたが、ラスに声を掛けられ、はっとしたように退却することを伝えようとする。

『そうだな、これは可笑しい。とりあえず一旦……ッ！』

…パアア……

レイが言い始めた瞬間、これまで何事もなかった大樹に異変が起った。

急に光りだした大樹とは反対に、今度は森が平静を取り戻す。

すると突然レイが引き寄せられるかのように光る大樹に近づいていく。驚いたラスがその腕を掴んだ。

刹那、大樹の光が大きく瞬き、光は次の瞬間には儚く消えた。二人と共に。

至高……の王よ…

……ぶりの…司……。

その後、異変を調べに来た者が同じように消えたのだが。

それはまた、別の話のことになる。

始まりの鐘を鳴らせ（前書き）

やっと、第一幕が終了しました。

感想待ってます。

新しいキャラも出てきました！

ライカと同じように暴走してしまいそうですが…

温かい目で見守ってください、よろしくお願いします。

始まりの鐘を鳴らせ

光に飲み込まれてからいつたいどのくらいが経っただろうか。とある森の中でラスは目覚めた。

「…チツ、どこだよ、ここは。」

そんなことより、レイ！　レイ、無事か？
どっか痛いとかないか？」

周りを見渡すとすぐにレイに駆け寄る。

このような事態に陥っても相変わらず繊細な物に触るかのように抱き起こす。

ピクッ

瞼が震え、美しいアメジストの双眸を現す。

『…うつ、ラス？　ここは？』

「分からない、気が付いたらここに倒れていた。」

ラスに手を持たれつつ、ゆっくりと立ち上がったレイはひとまず森を抜けることを提案した。

何故かマップ画面が真っ白でここがどこか分からない以上、迂闊なことは出来ないのので地道に歩いて行くことを。ラスはレイを気遣い飛行を希望したが、レイは何があるか分からないので却下した。

『ここから二時間ほど歩いた所に人が住んでいる村があると木々が言っている。そこをめざすぞ。』

レイは頭上を振り仰ぎ木々からの助言を受け入れた。
木々の声を聞くことのできないラスは《搜索^{サーチ}》を使って範囲内に人がいることを知る。

そのことをレイに伝えようと、とりあえず接触することになった。

「対象は一人、プレイヤー情報が出ていないからNPCの住民だと思っ
思う。」

『なら、情報を持っている可能性は低いな。情報が得られなかった
場合は村へ向う、いい？』

「了解！」

ラスに先導され、木々に誘導してもらい歩きながらぐんぐんと目標
に近づいてゆく。

ガササッ！

「うおわっ！？ またか、巨大熊^{グロースベア}や！ だれかおらへんか！」

レイとラスは顔を見合わせ、即座に声のした方向に走り出した。
走りながらラスは抜刀し、レイは下級魔法^{ロウアーマジック}を唱え始める。

巨大熊^{グロースベア}といえば物理攻撃力と物理防御力に秀でている反面、魔法が
使えず、魔法防御力が弱いという新人プレイヤー用のいわば、登竜
門のようなモンスターである。

討伐推奨レベルは150前後と、巨大熊^{グロースベア}を倒したらひとまず一人前
と認められる。

ザンッ

後ろ足で立ち上がった巨大熊グロースベアと先ほどの叫び声の主である学者風の青年の間に、先にラスがたどり着き、巨大熊グロースベアを一刀両断した。

シュツ

『……《雷光之矢》！』

「どわっ！」

ドスッ！

一足遅れたレイが、詠唱が完了したが不要になってしまった《雷光之矢》ライトニングアローを巨大熊がいた所（現ラスがいる所）に向けて放つ。

過たず矢はラスが直前までいたところを射抜き、後ろの木を貫通して消滅した。

『……チツ、すまないラス。巨大熊グロースベアを狙ったんだが、ラスが先に仕留めてしまったからそのまま飛んでいってしまったようだ。危なかったな。』

ラスと青年は矢の威力に圧倒され、顔を青ざめさせていたが、矢が貫通して風穴が開いたところを見たまま固まっている青年と違い、悲しいかな、長年のことで慣れてしまっているラスはすぐに現実に戻ってきた。

「嘘だろ！」

あれは、明らかにオレが斬ったから苛ついてオレをねらって射つただろ！

しかもチツて言った！」

ラスの大声に驚いて我に返った青年は助けてくれたことに礼を言おうとするが、ラスの必死な抗議を無視して青年を覗きこんでいたレ

イの至近距離での美貌にまた固まる。

『ラス、この人、また固まったぞ。』

レイに無視されてしょぼくねつつも律儀に巨大熊グロースベアから爪を採集してきたラスがそんな二人を見て頭に？を浮かべる。

「何やってんだ？」

それよりお前、ボロボロだが、怪我とか無かったか？」

青年は話しかけられたことでやっと現実に戻った。

「あ、ああ、大丈夫や少し切ったぐらいで大事無い。」

『痛そうなので一応治しておきますね、彼の者に癒しを与えよ、《ファーストエイド応急手当》』

スウ…

巨大熊グロースベアから逃げている最中に枝が何かで傷つけたであろう腕や足の傷が光の粒子と共に消えてゆく。

青年は知らず知らずのうちにしかめていた顔を安らげる。腕を曲げたりして調子を見つつ、青年は尋ねる。

「ありがとな、キレーな別嬪さん。ワイはリヤス、リヤステイナードや。あんさんらは？」

こん辺りの奴っちゃーないみたいやけど？」

別嬪さんみたいなのが近くに住んでおったら噂になつとるやろし。

青年の言葉はどこかの方言だろうか、どこことなくある地方の言葉

に発音が似ている。

レイとラスは一瞬目を見交わした後、レイが一步、足をリヤスに進める。

『私はレイ、彼はラス。

実は、異変のあった森を探索中光に飲まれて、気がついたらここにいたんです。

もしかしたら隠れ移動地点だったのかもしれませんが。』

レイの話を聞くに連れて、リヤスの目がキラキラとし始める。

「移動地点やて！？ 本当か、本当であつたんか！？
ワフゾン マジ

そんな神話に出てきそうなもんが！

つてことはあんさんらどっからきたんや？

過去か？ 未来か？ それとも異世界か？」

どこや、どこなんや！

異常なまでにリヤスのテンションが上がってゆく、レイとラスはすでについていけない。

リヤスの勢いに二人は気圧され、若干、いやかなり引く、心なしか身体も引けている。

『えっ？ ええ？ どうなさったんですか？

落ち着いてください！』

「これが落ち着いてなんかいられるかちゅーの！

ワイ、もしかしたら世紀の大発見したかもしれへんのやで！？」

ウオォー！ ワイヤったでー！ オカーン！（多分やけど）

興奮を抑え切れなかったリヤスの叫び声が辺りの森に響き渡る。

どうやら村人第一号は変人のようだ。

始まりの鐘を鳴らせ（後書き）

それにしても、リヤス、普段は普通の好青年なんですよ？

……（多分）

方言ってむつかしいなーと思った今日この頃です。

住民と接触を図れ（前書き）

あまりにもトリップするまでにかかったんで、第一章として区切り
ました。

住民と接触を図れ

二人は興奮し、変人化したリヤスを落ち着かせるためにいろいろと涙ぐましいほどに頑張った。

例) 状態異常を無効化する万能薬を飲ませてみる、鎮静効果のある魔法をかけてみる。etc…

効果はほとんど無かったが…

『落ち着きましたか、落ち着きましたね？
もう急に笑い出さないでくださいね。』

私たちは北の国と西の国の真ん中付近にあるセレスの森を探索していました。すると森の大樹がいきなり光りだしたんです。収まったらこの辺りに倒れていました。

…あの、どうしました？』

落ち着いていたリヤスは今度は考え込み始めた。

「ブツブツ…森やて？…いや、なんでや、どつかとつながってるんか？…ブツブツ…んんー？……ったいわ！」

ゴスッ！という音がふさわしいほどのスピードでリヤスを殴ったラス（苛ついているようだ）は今度は攻撃呪文アタックスペルを唱え始める。レイにこれ以上変人を見せたくないようだ。

「……大地に潜みし灼熱の焰ほむりよ 吹き出……」

「だー！ まてや、まてや！ 滅茶苦茶物騒やな、オイ、ワイは学者なんや！」

そやから、どうしてもそーゆう話とか聞くとシャーって自分の世界に入ってしまうんや。これだけは堪忍してくれや。学者の宿命ぢゅーわけやな。」

レイは大げさなまでに焦って謝るリヤスに微笑みながら（若干黒い気がする）手を振って安心するように伝えと、詠唱するために手のひらを前に突き出したままのラスにむかっていつのまにか取り出していた杖（物理攻撃力が高い）を向け、下から上に思い切り振り上げた。

ブンッ…グハッ！

あわれ、ラスは三メートルほどぶっ飛ばされて昏倒する。

目の前を横切っていったラスに顔を引きたらせたリヤスは、怖つ、バイオレンスや、ドメスティックバイオレンスや、レイって黒いわー、と呟いている。

一仕事終えたレイは殴ったときに乱れた髪を整えて、耳にかけ。そのときに顕わになった耳にリヤスが目を見張った。

「…嘘やろ、ちょっとまってや。」

リヤスの声に気づかなかったレイはリヤスを横切って、ラスに近づく。既に傷は治っていた。

「ッチ、この頑丈め。」

ラス、いい加減におきろ。ラス！」

「なあ、レイ、あんさん、もしかしてハイエルフとちゃうんか？」

不安と希望、興奮がごちゃ混ぜになった声で尋ねられてレイは戸惑う。

「だったらどうかするの？」

いつの間にか気絶から回復していたラスが起き上がってレイを背中に庇い、警戒しながら問う。

今までに同じようなことで何かあったのか、表情は硬い。

「別に、せな警戒せえへんでええで。たいしたことやないんや。ハielフはめっちゃ珍しいからな、ワイもちょっとしか会ったことなかったし、学者として会えて興奮しとっただけや。まあ、ワイやなかったらちーと危なかったかも知れへんがな。

せや、向こうの、一時間ほど行ったところに今滞在してる村があるんや。

そこで地図でも見ながらこん世界とあんさんらの世界の話でもしよ
うや。飲み物くらい出すで。」

でも行くんやったらレイ、耳は隠しといたほうがええで。

それはどういう意味か聞こうとするラスだが、ここまであからさまに話を変えられ、思わず言い詰まる。

元々その村に行くつもりだった二人に否があるはずも無く、三人は村への方角に足を進める。

パーティーにリヤスが入りました。

どこからかそんな幻聴が聞こえた気がした。

ところが、実際には村に着くには三時間以上も掛かった。
リヤスのモンスターとのエンカウント率が半端なく高かったことが
原因だろう。

湖で水を汲もうとすると湖の主が現れ、道を逸れると巨大熊、大蛇
etcに襲われ、心休まらなかった。

あまりの質より量のモンスターの数の多さに圧され、魔法を連発し
て集中力の切れかかっていたレイが巨大熊の爪攻撃を避けきれずに
腕を掠って血を流したときは、急いで傷を癒したレイが杖でラスを
殴らなければ、あやうくラスが森を焦土と化すところだった。

「ハアハア、……フウ、ここが…村、といってもワイはもうすぐ王
都に向けて行くんやけどな。」

「……………(ぐったり)」

「…ハア、何でお前はあんなに襲われてんだ！ あそこは野生の王
国か！」

ビシツと今まで襲ってきたモンスターから採集した物が入った袋を
持ち上げて指差し、ラスは吼える。

コクコクコク

レイも無言で息を整えながらも何度も素早く頷いている。
当然といえば当然かもしれない、あんなに襲われていれば。

「イヤイヤイア、じゃなかった、イヤヤ。

ワイかで全然なんで分かってへんわ、今日は厄日なんやるか、い
つもはちゃんとモンスター避けの守護薬かけてるから、モンスター
は寄って来んのやけどなあ

…ガサリ、……ん？ あ、今日使ったんは邪気薬やった。」

いやー、どおりでモンスターがわんさか寄ってくるわけやわあ。ははは。

カラカラと乾いた声で笑うリヤスの頭にとりあえず一発拳を落としたりラスはレイを連れて村の中へ入っていった。

「てて、でもなんで邪気薬マリシヤスボトルなんて入ってたんやろ、ワイあんま戦わへんからそんな危ないのん買った覚えないんやけどな。まさか、誰かの陰謀？ あんさんらはどう思う？

……ん？ っておらんのかい！」

せめてなんか言ってから行けやー！

いけやー

やー

傾きかけた陽の中でリヤスの声が虚しく響いた。

住民と接触を図れ（後書き）

リヤスは書きやすいです。モデルが近くにいると違いますね。
リヤスは本当は頭いいんですよ？

……多分。

点数つけてくれると嬉しいです。
よろしく願います。

両者の食い違いを正せ（前書き）

長らく遅くなってすみません。

両者の食い違いを正せ

『ここは何処なんだろうな、北の方で採れるビズベリー、西のほうで採れるセキル、ということは北西のセレスの森の近くなんだろうか。』

村の中心部に向って歩いて行きながら小さな果物店を覗いたレイがそう推測する。

「それならワイがどのへんか教えたるわ、これでも歴史学とか得意やねん。

とりあえず、ワイの泊まっとる宿屋にでもいかへん？
っていうか置いてかへんというや、ひどいで。」

追いついてきたリヤスが、ワイ役に立つで、とばかりに笑顔で提案してきた。

どちらでもよかったレイがラスが頷くのをみて、リヤスの案内に従い、宿屋へと急いで行く。

ちょうど夕立が雷鳴を連れてやってきたところだった。

宿屋に着いた瞬間、扉の外からザーザーという雨音が聞こえてきた。やがて雷鳴が鳴り響き始めた頃には既に部屋を取って、三人は円テーブルを囲うイスに座っていた。

レイはひとまず落着くために道具箱トルボックスから好物のセキルの実を三つほど取り出し、技術スキル、《圧搾コンプレッション》を使って、ジュースにしてグラスに注ぎ、テーブルに置く。

レイとラスにとっては何気ない動作だったが、リヤスの受け取り方は違っていた。

おっかなびつくりとセキルのジュースを持ち上げて覗きこんでいる。

「それ、どうやったんや？」

空中で果物が搾られてったみたいやけど、……ん？

なんや二人とも、こっち凝視して、アレか、ワイの格好よさにやっ
と気づいたんか。」

くだらないことを言うリヤスの言葉を聞きながら、

レイは背筋が冷たくなってゆくのを感じ、ラスも同じようなものを
感じているだろうと頭の片隅でぼんやりと思った。

それくらい《コンプレッション圧搾》は一般的なものはずだった。

「…何を言っているんだ。《コンプレッション圧搾》なんて技術便利だから皆持つて
いるだろ？」

NPCだつて例外じゃない、バーテンダーだつてしなければならな
いから必須技術ネセサリススキルなはずだぞ。」

レイは今までの違和感が急速に目の前で形作られていくように思わ
れて、ステータス画面を呼び出して操作し始める。

「技術？スキル NPC？何やそら、聞いたこっちや無いわ、さっき使こ
たんは魔法とちゃうんか？」

ワイ、結構生きとるケドそんなん見たことないから興奮してきたん
やけど。

それ習得したらいろいろ搾るのに楽そうでええなあ。

……って、ん？」

ここにきて、ようやく双方の食い違いに気付きだしたようだ。

「まさか、まさか、あんさんら本当に異世界から来たんとちゃうか？」

異世界から来たんは冗談で、精々遠い地方から移動呪文に失敗でもしてグワーってぶっ飛ばされて来たとか思ってたのに。」

「いや、でも、まさか……」

『もしかしたら、ここは本当に異世界なのかもしれないな。
ラス、一回ログアウトしてみろ。』

今までずっと画面を弄って会話に入ってこなかったレイが唐突にいった。

顔色が少し青ざめているのは気のせいではないだろう。

ラスは疑問符を浮かべながらもレイが言うならとログアウトをする手順を踏むが、徐々に驚愕に染まっていく。

先ほどからレイはログアウトを選択しているのだが、“ログアウトしますか？”の画面で“yes”を押しても元のステータス画面に戻るだけで何の意味もないものだった。

「まさか、本当にここは……」

異世界なのか

この世界の常識を叩き込め（前書き）

ためておいた小説を一気に消化しました。

この世界の常識を叩き込め

事態の重さを本格的に悟った二人はこうなったからには、と腹を据えてリヤスを睨むように見つめる。

気圧された感のあるリヤスは若干腰が引けている。

え？　なんかワイ食われそう…

「おふたりさん？　目が、目が怖いで、もうちょっとリラックス、リラックスせなあかへんで。

とりあえず、あんさんが異世界人だと仮定して、この世界のことを説明しとくな。

この世界は大小……いくつや？　まあ数十の国がある。大国で言うと、東西南北の国、中央にあるギルド主体のツンフト国、北西にエルフや竜族が集まって暮らしてるセレス国、ツンフト国を間に挟んでセレス国の反対側の南東にあるダークエルフや魔族、知能のある高位モンスターがあるグリムリ国。あとは小さい国やな。どや、ここまでで知つとるのはあるかいな。」

どうやらまったくの知らない世界ではないようだ。だが、セレス国、グリムリ国というのは月の王の世界には存在していない。

そのことを話すとリヤスは難しい顔をして部屋にあった机から地図を持ってきてテーブルに広げた。レイとラスは密かに技術、スキル《暗記メモライズ》を使って地図を新しく登録した。

「これがこの世界セレネミスの地図や、セレス国とグリムリ国が無いちゅーことは、五大国と小国だけか、基本的には戦争してないこととは一緒やな。他には……」

世界が違えば常識も変わってくるようだ。

たとえば、挨拶で頭を下げると相手への隷属を示したりするので間違えたりしたら大変だ。

「はー、これは超天才学者なワイが常識を叩き込んだいた方がええな。」

『できればお願いしたいです。』

「分かった。とりあえず誰でも知ってそなことだけ教えとくわ。

この世界の共通通貨はFフェザー言っんや。」

ジャララ…コトリ

「いいか、見てのとおり左から銅貨、銀貨、金貨、んで、ここにはないけど白金貨、フェザー晶貨や。

銅貨一枚が1F、銅貨百枚で銀貨一枚分、銀貨百枚で金貨一枚分、以下省略や。簡単やる？

ん？ どんくらい価値があるか？ そやな、この辺りの村やったらメシ食うのに銀貨四、五枚あつたら十分やで。

一般的な初心者 of 冒険者用の剣やったら金貨一枚あつたら買えるとちやうんかな。曖昧？ ワイ剣なんて使わへんし、知つとるのは杖ぐらいやで。

じゃあなんで剣で説明しようとしたか？ 知らへんよ、そんなん、

なんか天の声？ が聞こえてきたんやもん。

なんやねん、電波系って、冗談に決まっとるやろ。

……何の話したっけ？ ああそや、杖は金貨二枚はいるで、どうしても魔法触媒マジックカタリストを付けて魔力を付与せなあかんから割高になるんやってさ、これ武器職人の友人の受け売り。」

………

…

「…ご苦労さん、こんくらい覚えとけば、あとは遠いところから来たって言えば誤魔化せるやと思うで。」

そういえば、もうこんな時間か、三時間も話しとったんやな、今日はここに泊まるやろ？

宿のオバちゃんに言ってきたる、ここ二人部屋やからここでえやろし。

戻ってきたら何かお金と交換できそうなんと交換したるわ、ほなチャッチャといってくるから待つとき。」

キィ…パタン

返事をする気力も無いのか、一気に沢山の知識を詰め込まれ、ラスはテーブルに突っ伏して手だけをヒラヒラ振っている。

さすがにレイも頭が痛いのか、情報処理しているからか、米神のあたりに手を当てている。

『本当に私たちは異世界、もしくは月の王という0と1の世界にきてしまったみたいだな。』

夢か何かだと否定するにはここは現実^{リアル}すぎる。

世界観が月の王に酷似しているらしいことが救いだな、これでわけの分からない世界だったら目も当てられなかっただろう。』

先ほど《^{コンプレッション}圧搾》で出していたセキルのジュースを飲んで、頭を使いすぎてほてった身体を冷ましながら、レイはどこか自分に言い聞か

せるように呟いた。

いつの間にか雨は止んだのか雨音は聞こえず、夜独特の静寂と共に、下の階のおそらく食堂の辺りから人のざわめきが聞こえてくる。どうやら夜は酒場と化すようだ。

と、いきなりラスが顔を上げてレイに太陽のような笑顔を惜しみなく見せる。

「とりあえず、目下の目標はどうやってたら帰れるか探すこと！ んでもってせっかくの異世界だ、楽しまなきゃ損だ！

でも、死んだら帰れるとか生き返れるとかは分からないから試せないな、リヴァイウマジック蘇生魔法があるかはあとでリヤスに聞いといたほうがいいなとはいえ、ま、気楽に行こうぜ、ケ・セラセラだ。

レイ、そんなに気にしてもどうにもならない、気をもむなよ。」

どうやら何かふっ切れたようだ。

元から樂觀主義のきらいのあるラスは、レイに危険のあることなにかぎり気楽である。

既にこの世界に胸を躍らせている。

そんなラスを見てみると、レイはなんだか自分だけ真剣に考え込んでいるのが馬鹿馬鹿しくなってきた。

ああ、ラスは…

『ふふつ、そうだなこうなったらとことんまで探索してやろう。頼りにしているよ、ラス？』

意味深な笑顔で見つめられ、蛇に睨まれたカエルの気分を味わいながら、あ、これはちょっと早まったかも、とラスは早くも少し後悔した。

恐ろしき事実を忘れ去れ（前書き）

今日は私の誕生日なんです。

誕生日に投稿できるってうれしいです！

これからもよろしくお願いします。

恐ろしき事実を忘れ去れ

『それにしてもラス、このお金、とっても見覚えがあるんだが、私の気のせいだろうか。』

注意深く金貨だけを見つめ、技術、アナライズ《分析》を使ってからはぼんやりと眺めているレイが尋ねた。
実はラスも気付いていた。

「現実逃避したいのは一緒だが、あえてはつきりと言おう。
この金貨とオレたちが月の王で使っていた金、しかも最小単位は一緒だ。

もつと言つてしまえばオレたちの所持金は6000万Fフェザー越えた。一時期稼ぎまくったからなあ。
単純計算したら……いや、やっぱ止めよう。兆つて出てきた気がする。6兆とか、ないだろ。

そうだよな、月の王で1Fフェザーが分かりやすいように金貨でも現実で1Fリアルが金貨だったらどれだけ金が安いんだってなるよな。
はあ、どうするこれで使えてしまったら一気に億万長者だぜ。」

ハハ、でかすぎて使い道とか思い浮かばねえな、と現実を突きつけながらも自分の言っていることの現実感のなさに笑い出したラス。
一億円なら見たことあるぞ、と慰めているのか余計に混乱させているのか分からない相の手をいれるレイ。

一言でこの状況を言うとしたら混沌カオスである。

カチャ、パタン

「どうしたんや、ワイがおらへん間にずいぶんと憔悴しとるけど。」

「いえ、大丈夫です。」

それより、これを見てもらえますか。」

リヤスが部屋に入ってくる少し前に金袋を出して、月の王で使っていた硬貨を取り出してリヤスに渡す。

受け取ったからには、とじつくりと鑑定して、やがて本物やな、これがどないしたんや、ってより金もつとったんかい、突っ込んだ。

「実はこの金貨は向こうの世界で使っていた物なんです。」

「それは良かったやないか。」

「それが最小単位だったり……」

ピシッつという音が聞こえてこないのがおかしいほどにリヤスは瞬間的に凍結した。

おとなしく二人のやり取りを聞いていたラスはご愁傷様とばかりにリヤスの肩を叩いた。

すぐるようにラスを見るが無情にも首を横に振る。

「じよ、冗談きついで…そんな、まさか、本当で？」

「いくら持つとるん？」

除々に現実を受け入れだしたりヤスが、何故か右手の親指と人差し指を曲げて引っ付かせて丸を作る。

とはいっても事実をそのまま伝えるわけにはいかないので現実で使っているサイフの中身を思い出してそれを伝える。

「確か……二、三万だったような。」

リヤスはムンクの叫びのような格好をしている。

「二、三万！　ってことはえつと二、三億ってことやろ。」

大金やなあ、盗まれんように気をつけるんやで。

特にレイ！　一緒に浚われんなや。」

言われなくても分かっている、とばかりにラスは立ち上がってイスに座ったままのレイを抱き込む。

（所持金が一千万を超えていると言ったたらどうなっていたのやら。）

まあ、考えても詮無いことを、と頭を振って思考を切り替える。

「ところで、この世界での魔法の一般的水準はどのくらいなんだ？
ちなみにオレらの世界ではさっきの《コンプレッション圧搾》とかは一般的だったぜ。」

「ええなあ、そっちは魔法が発展しとるんやな。」

魔法は得手不得手あるけど皆使えるで、魔術師って名乗つとる奴らの平均はだいたい緑色やな。

ち・な・み・にこのスーパードायナマイトデンジヤラスなワイはなあ、なんと藍色なんやで！　しかも若干紫色がかった！　どや、すごいやろ？」

……

「……なんや？」

「…すいません、何ですか、緑とか藍とか、何かの程度だとは分かるんですけど。」

リヤスはレイの話を聞くなり隣の、どうやら隣に泊まっているようだ、部屋に駆け込み、しばらくガサゴソという音が聞こえてきていたが、音が止まるとまたすぐに二人の部屋に飛び込んできた。

手には出るときには持っていなかった握りこぶし大の結晶を持っている。とても綺麗な藍色で少し紫がかっているようにも見える。

その結晶を二人の前に置き、説明した。

少し興奮しているのは今から話す話が好きな分野なのだろう。

「これが魔力を計ることの出来る結晶で魔力の保持量によって色を変える特性を持つとるちゆう珍しい結晶、虹晶イリスシュタインや。今は藍色に紫がかってワイの色になつとる。

色は下から順に赤橙黄緑青藍紫と変わつてく。世界の比率的には赤：

橙：黄：緑：青：藍：紫＝20：40：20：10：8：2：0ぐらいか。

たとえば、魔力がからつきしない奴やつたら赤やな。この世界はたとえどんなに少ない奴でも魔力を持つから。」

古の石から開放せよ（前書き）

長らくです。

テストが近いので遅々として進んでくれません。
遅くなって申し訳ありませんでした。

古の石から開放せよ

それからのリヤスの説明は長かった、途中何度も脱線しかけたが、そのたびにレイとラスに軌道修正されていた。ぶっちゃけ何回もラスに殴られつつも話し続けるリヤスはレイには不気味にも見えた。

要約するとこのような話であった。

「通称虹の七色って呼ばれとる。赤橙黄緑青藍紫や。順番に下から教えてくで、

赤、全然魔法の才能が無い奴や、剣士とか魔法を使わん職業に就くのが大半やな。あと、アホ面しとる奴が多い。

橙、人間は大体橙やな、《ファイヤーボール火球》とか簡単な魔法を使えるようになるから魔法剣士に多いな、補助として使うてはるわ。

黄、これは魔術師見習いとか魔力を付与する職人あたりがおる。どっちになるか迷って大変らしいで。

緑、さつきも言った気がするけどこの色は魔術師に多いな。あと魔族とかもそうやったと思う。この辺から数が激減するんや。

青、こん辺りから人間やったら一流の魔術師呼ばれるな。竜族やダークエルフがだいたいこの色やったで。

藍、これはもう人間には無理やな、伝説の魔術師！とかやったら藍に行くか行かんかったんやるな。種族的にはエルフは青と藍の中間ぐらいやからワイの紫がかった藍はすごいんやで。

最後に紫なんやけど、この至高の色はもはや失われたって言っても過言やない。」

とかなんとかこれでも要約したほうだ。

「最後の紫色を持つとったんはセレス国の国王、そして最後のハイ

エルフであつた太陽王フォイボス。

彼が突然亡くなつてはや百年、セレス国に王はおらん。セレス国の国王になる一つにして絶対の条件には紫を持つことが必要やからや。でも、もう王がおらんのも限界に近い、国王がおらんかつたらいくら宰相らが頑張つても国は弱体化する。

昔からセレス国を狙つとつたグリムリ国が最近不穏な空気を漂わせているつちゅー話やさかい、一秒でも早く誰かが紫をもつとる奴を見つげるためにセレス国を一步でも出る住民は虹晶イリスシュタインを持つことが義務付けられているんや。」

やから、試してみてくださいへんか？ 二人やつたら紫がでる気がするんや。
頼む。

常の飄々とした空気は鳴りを潜め、真剣に、熱望するように二人を見詰め、テーブルの上に置いていた虹晶イリスシュタインを捧げるかのように差し出した。

『そう言われても、私たちは異世界人ですし、第一そんなに私たちに魔力があるとは思えません。』

「いいんや、別に王になつても旅とかしてくれたらいい、紫つてだけでグリムリ国への威嚇、抑止力になるんや。

それに、たとえ紫やなくても自分の色を知っておくのは大事やで、ギルドに入るときとかに優遇されたりするで上位者は。」

「ふうん、国に縛られないのか。
ところで、今さら過ぎるんだが、お前つてセレス国の者だったんだな。」

内心、話を聞きながらレイを国に縛り付けようとするなら殴って気絶しているうちにレイと逃げようと考えていたラスが話に加わる。そんなことも知らず暢気にリヤスは

「そうやで、ワイはセレス国の王都セイレーンに住んどる。

職業は学者兼魔術師。昔はフォイボス王付相談役もした。幼馴染ってやつ。

種族はエルフや。」

ほれ、とエルフ特有の尖った耳を見せる。確かに髪で今まで隠されていた耳は人外のものだった。

「話を戻すで、とりあえず、もう何でもええからこの虹晶イリスシュタインを触ってくれ。

大丈夫、痛いとか危険なことはないから。ほい。」

二人が頷くのを見てリヤスはポンッと大事にしている割には気軽にラスに向かって放り投げた。

空中で虹晶イリスシュタインはその色を除々に白く、透明に戻していくが、ラスが受け取った瞬間に先ほどよりもより濃い色へと変化してゆく。三人が息を潜めて見守る中、その色は限りなく紫に近い藍でとまった。

「惜しい！ あとちょいやったのになあ、それでもワイよりは魔力保持しとるんやな、大体藍紫くらいか？

王都に戻ったらもつと高性能なんで色を更に分けれるやつがあるんやけど、赤赤から紫紫まで。

ワイは藍青、ラスは多分藍紫やな。」

地団駄を踏んで悔しがっていたが、すぐに学者らしく分析に熱中し

だした。

ラスはそう言われても基本剣ばかり使うのであまりピンとこないようだ。

ふうん、と気のない返事をして、隣で虹晶を覗きこんでいたレイに早々に渡そうとした。

リヤスは本命のレイが手を触れるのを固唾を吞んで待つ。

『きつとラスより少し上ぐらいの魔力ですよ。そんなに期待されても……………！？』

ピキ……………パリン！

…やっとな…出…

レイがラスから虹晶イリスシュタインを受け取ったと同時に、あっという間に色が紫に染まった。

それだけに留まらずヒビが入ったと思うと数多の破片となって割れてしまった。

レイは目を瞑っていたので、ラスとリヤスはそもそも見えないので、誰も見ていなかったが、割れた瞬間何かが虹晶イリスシュタインから出て消えていった。

揺らめく意識を繋ぎ止める（前書き）

遅くなりまして、無事？ にテストも終わりました。

揺らめく意識を繋ぎ止める

幸い一番近くにいたレイは虹晶イリスシュタインが避けるかのように割れたので傷を負うことはなかったが、何か声が聞こえたような気がしてぼんやりとしていた。

それを勘違いしたのかラスがレイに傷がないか確認するために覗きこむ。

「…レイ？」

『…あ……うん、なんでもない、大丈夫。』

破片が床に散らばって思わず歩くのに躊躇しそうな中、リヤスがレイの下に跪いて手を取り、自分の額に押し付けた。

『何を……』

「頼む！ 不在の王でええ、セレス国の王になってくれ。百年間王を待つとったセレス国の民の悲願、叶えたってくれ！」

そう言われてしまうと、おもわず頷いてしまいそうになるが、国王という大役ゆえにすぐに決めることは出来なかった。

考えていて欲しいと言われ、レイは戸惑いつつも承諾した。

リヤスは隣の部屋に引スキルつ込み、静寂が二人の間に落ちる。
ひとまずレイは技術、《掃除クリーニング》を使って破片を取り除いた。

『国王、か、大役すぎて考えられない、でも、百年も待っていたと

言われたら断りづらいな。

ラス、どうしたら良いと思う？』

あまりのことに精神的に疲れきってしまったレイは、残っていたセキルのジューズを飲み干すと、昔から混乱すると親しい人に抱きつくという少々可愛らしい癖を発揮してラスに抱きついた。

慣れたことなのでラスも手を広げて、むしろドンと来い、とばかりに抱き返す。

ラスの胸元に頭を寄せて、心臓の音を聞いていると段々と心が落ちていくのが分かった。

どんな時でもそばにいてくれる人、それがラスだった。

ラスも同じように思ってくれているとレイは信じている。

ラスがレイ以上に自分に依存しているとは気付かないまま。

「オレはレイが国王になっても良いと思う。

別に国王になったからって引き離されるわけじゃない、城とかに縛られるわけじゃない。」

そりゃあ、最初は城にいないといけないだろうケド。

気楽に拠点が出来たとも思っとけよ。

オレはレイ専属の護衛剣士にでもなろうかな。」

『ふふっ、言ってくれる。

確かに、国王といってもグリムリ国への牽制になれば後は自由にしてもいいみたいだし。

国王か、考えてみれば面白いことが起きそうな職業だ、どう掻き回してあげよう。』

『「楽しみだ（な）。」』

ふふ…ふふふ…

くくく…

果たして国王は職業で、掻き回してもいいものだろうか。
リヤスに聞かれれば泣き出されそうな発言をサラリと聞き流したラ
スはレイを抱きしめたまま、部屋の奥へと歩いてゆく。

『ラス？ 何処に…』

「ん？

久しぶりに一緒に風呂にでも入…ガス！…グッ！」

紫電一閃、空中より取り出した杖でラスを殴る、しかも先の一番細
く鋭いところで。

気を抜いていたのかもろに入り仰け反ったままのラスを更に遠心力
を利用した杖で吹き飛ばしたレイは一人で風呂へと入っていった。

「これでちよつとは落ち着いたか。」

一人部屋に残り、倒れ伏したラスの誰にも聞かすつもりのない呟き
が部屋に落ちて消えた。

『…ラスの馬鹿。』

聞こえてるよ、恥ずかしい奴。

でも

……
アリガト。
」

漂う危険を察知せよ（前書き）

そろそろサブタイトルを考えなければと思いつつ、もはやネタなしの自分。

まあ、まだいいですね、と延期、面倒くさいから↑オイ
出来ればサブタイトル募集中！

漂う危険を察知せよ

「おはようさん、起きるのはやいなあ、メシはもう食ったんか？」

レイが食堂に下りていくと、リヤスが一人で座ってオートミールのようなものを食べていた。

どことなく眠そうにし、目の下にクマを作っているかぎり、一睡もしていないようだ。

『朝食はもう先に部屋でいただきました。』

それで、あの…昨日のことなんです。』

リヤスはスープを掬っていた手を止め、真面目な顔つきになり、前に座るように促した。

「分かつとる、国王なんてもん、すぐに決められんのも当然や。」

『はい、国王になってもいいです。』

リヤスは頷く。

「そうか、でも諦めへんで、国王になっても良いって……って、はいんかいな！

そりゃまた…」

リヤスは頷いたかと思えば、首を振り、勢いよく立ち上がってまたすぐに座りなおした。

『はい、よく考えてみれば別に国王になっても縛り付けられたりしないんですよ。』

基本自由にしてくれるなら抑止力として国王になるのもいいかなって。

ラスもいますから一人じゃないです。

それに……もし何かあっても、今までラスと完膚なきまでにプチッと潰してきたので、同じようにしちゃえばいいことです。』

リヤスは持ち前の高い危機察知能力に従って後半の発言を脳内消去した。

思わず立ち上がったリヤスを尻目にレイはテーブルの上にイチゴに似た果物フレサの実を数個出現させ、ラスに言われたとおりに（美容のためとは気付いていない）食べる。

そのまま、二人が食べ終わるまで会話が始まることもなく、時は過ぎた。

「ところで、一人みたいやけど、ラスはどうしたんや、まだ寝とるんか？」

暗に一人でいることを咎めつつ、ようやく朝食を食べ終えたリヤスがプレートを戻してきてからイスに座ったまま待っていたレイに尋ねた。

『ラスですか？ お風呂に入ってますよ。』

「風呂？ なんやあいつ朝風呂派やったんかい。」

ニヤニヤとリヤスがからかうネタが出来たとばかりに含み笑いをした。

『いいえ、昨日お風呂に入るのを（杖で殴ったりして気絶させたから）忘れただけです。』

リヤスはなんとなく今の会話の中に省略された物騒なものがあるような気もしたが下手につっこんではいけない気がしたので、そうか、と言うに留めた。まったくもってたいした危機察知能力である。

レイは満面の笑みで微笑んでいるが、そこだけ見えないブリザードが吹き荒れている。

実はラス、あの後も風呂に入ってこようとしたので杖で殴った後レイが《睡魔》^{サンドマン}の呪文を唱えて眠りに誘い、そのまま床に放置したのである。

ラスが起きたら朝で、身体に毛布が掛かっていたというなんとも情けない事情があったりする。

そのため、今の時間になってようやく風呂に入ることになったのだ。ちなみにレイはぐっすりとベッドで寝ていた。

リヤスはなんとなく悟り、ラスに少し同情した。

そうとは知らず、ラスがやっと食堂に下りてきた。心持ち髪が湿っている。

「なんだ、レイ、もう話したのか。
つまらん、リヤスのアホ面が見たかったのに。」

「アホ面とはなんや、アホ面とは！
このワイのクールでセクシーな顔のドコがアホ面やねん！
火い吹くぞ、コラあ！」

確かにリヤスは黙っていれば学者であり、魔術師でもあるので全体的に線が細く、（とはいってもエルフはたいてい線が細いが）知的でミステリアスなエルフ美人である。

もつとも口を開いてしまえば、知的というよりは口が軽く、ミステリアスというよりは胡散臭くなってしまうが。

「クール？ セクシー？ はん、鏡を見て出直して来い、そういうのはレイにこそ相応しいんだ。」

「レイと一緒にするなボケエ！ 次元がちがうんや！」

『ラスは格好いいぞ。』

二人のじゃれ合い（？）を楽しく見守っていたレイが思ったままを口にする。

「ま、オレは格好良いな、レイは綺麗系、リヤスはうさ……不思議系？」

ラスは直前で言い直す。

『うさ？』

「絶対胡散臭いとか言おうとしたやろ、オイ。」

ひくりと頬を引きつらせてリヤスが食って掛かった。
ラスはあらぬ方を見て無視している。

「チッ……無駄に目ざといな（ボソッ）」

キャンキャンとその言葉も聞きつけたリヤスが猛抗議しだした。

「黒っ、コワッ！ 酷いで、コイツ酷いでレイ、あかんで！」

食ってかかるリヤスに聞き流すラス。意外といいコンビになりそう
だ。

もっとも、ラスがレイから離れるとは思えないが。

二人の言い争い（レイにとってはじゃれ合い）が一段楽した頃。

「それにしても、どうしてレイの時はあの結晶、虹晶イリスシユタインだったか？
割れてしまったんだ？

危険があつたじゃないか、危うくレイの柔肌に傷がついてしまうか
もしれなかったんだぞ。」

どうしてくれる、と、どちらかと言うと虹晶イリスシユタインが割れたことよりもそ
の破片でレイが傷ついたかもしれないことに重点を置いて責めてい
るところにラスの性格が現れている。

「ワイかてまさか割れるなんて思ってたわ。」

知識としてなら虹晶イリスシユタインがパリンする状況っていうか原因うちゅうか知
つとつただけだ。」

『割れる理由ワケがあつたんですか？』

「ある、あんま知られてないけど実はあつたりするんよ。」

最初の目的地を定める（前書き）

寒くなったり暑くなったり、まさに三寒四温ですね、身体が弱いほうなので毎日微熱が続いていますが、負けずにがんばりたいと思います。

最初の目的地を定める

本来、虹晶イリスシユタインというものはとても硬質で、ダイヤモンドで地道に削っていくしか方法はないと言われている。

しかし、魔術師の間では半信半疑ながら脈々と受け継がれてきたもう一つの方法がある。

それは

「ハンパない魔力を一気に注ぐ、やな。

まさか本当やったとは思っても見いひんかったわ。」

呆れたように、しかしリヤスは眩しい物でも見るようにレイを見た。

「ハンパない、ね。ま、オ……レイだしな。

逆に言えばレイで割れなかったら誰が割るって話なんだけどさ。

レイは魔法に関することなら知識面でも技術面でもあっちの世界では随一の力を持つてたぜ。」

『オの次に何が来るのかは聞かないでおいてやる。

まあ、魔法に関することがハイエルフの特性でしたから。デメリツトを補って余りあるメリツトということです。』

その言葉に一応納得したのかリヤスはもう一つの方法を話し出した。

「もう一つの方法はな、いや、その前にまず、基本として赤の平均魔力保持量を一とする。

橙はその四倍の保持量の四、黄は十六、って感じに四を掛けていくと分かりやすいで、紫で赤の四千九十六倍、つまり紫一人で赤の者の四千人分の魔力を持つとるってことや。

それだけです。ごいってことが分かるやろ？

それで、配られとった虹晶イリスシユタインは赤の五千倍以上の魔力を注がれると砕ける……らしい。」

最後のほうは自分の言っていることの滑稽さに気付いたのか小さくなっただけ。

「さもありなん、レイ自身も半信半疑なのでしょうがない。」

「つまり、私の魔力保持量はまだ未知数ってことですか？」

「言っただけじゃあそういってこつちやな。でも王都に行ったら簡単に分かるで。」

王都セイレーンにある王城の中には虹球ニジキウの間まちゅうところがあつてな、その名のとおりの部屋の中には大人一人半ぐらいの球体の虹晶イリスシユタインが真ん中に安置されとるんや。

虹球は二段階目、つまり藍紫とかやな、まで計れたり、紫紫以上までも計れたり、それを数字に出したり出来る物なんや。」

ま、言うたら虹晶イリスシユタインのスゴイ版やな、と、どや顔で見てるリヤスに、パチパチと気のない拍手を送るラス、そして二人を頭の片隅に置いたまま一人マイペースに考え事をしているレイ。まったくもって協調性がないことこの上ない。

しばらくはそのままだったがふとリヤスが固まり、次いで叫ぶ。

「せや！ 危うく忘れるところやった。あかん、あかんで！」

あんな、セイレーンで思い出したんやけど、お二人さん、すまんけど一緒にセイレーン城まで来てもらうで。」

何を言い出すかと思えばそんなことかと、曲がりなりにも国王にな

るのだから当然そのつもりだった二人にとっては何を今さら、なこのため、心配して損したと安堵して息を吐いたのだが、そうとは知らないリヤスは二人のついたため息を誤解し、慌ててその理由を述べた。

「あのな、藍以上の色が出た者は一回虹球の間で詳しく計ることが義務付けられているんや。

これは国際会議で決められたことやからどこの国でも同じやで。

虹球の間はたいいていの国には作られとるからそこんとこどこでも計つていいんやけどな。

ま、セレス国の虹球が一番デカくて精度が高いんやけど。ふふん。やから、レイだけやなくてラスにも計ってもらなあかんねん。」

ふうん、とやはり魔法をあまり使わないがゆえに興味がないことが丸分かりなラスの返事とは対照的に、
先ほどからどうにかして虹晶を手に入れて解析してみたいと好奇心で一杯のレイ。

そこにレイにとっては朗報が。

「レイ、レイ、アレやったらセレス国で採れるから結構他所より簡単に手に入るで。」

ばああ、とレイの周りに花が散る幻覚が見えて慌ててリヤスは首を振る。

あれー、おかしいな、寝不足でワイー瞬幻覚が見えたで、とラスに言おうと横を向くが当の本人はほのぼのと喜んでいるレイ（幻覚付き）に悶えていた。

変な人おるでー、レイー、逃げやー。

いつ何時グリムリ国との間で戦争が起こるかもしれないという暗い

世情の中、ほのぼのとした雰囲気が漂う。（若干一名疲労困憊しているのは無視）

藍二名に紫超えが一名というまさしく人外魔境。

事態は始まる前から既に決していたと、後に苦勞することになる王の側近は語った。

最強ともいえる三人がこのような状況のため、意外と未来は明るいかもしれない。

とりあえず、まだ見ぬグリムリ国に黙禱を捧げておこう。

「あかん、ラスは一見ツツコミに見えてボケやった。そやかてレイは天然ボケやし。

ワイには荷が重過ぎるんとちゃうか？」

どよんとした雰囲気で哀愁に満ちたリヤス。

「ゴホンツ、えーとな、明日にでもこの村を出発したいんやけど。」

会話も終わり、レイが出したティーセットで食後のお茶を楽しんでいると、藍色の美しい手帳に目を通していたリヤスがそう切り出した。

『明日、ですか。随分と早いですね、もう少しこの村で常識を学んでおきたかったんですが。』

分かりました、何か理由があるのでしよう、後で食料でも買い込んでおきますね。』

「何で早く出るんだ？」

別にどうでもいいが一応のために聞くラス。

「出来るだけ早く王位につけたいのもあるんやけど、実はこん村ん中にダークエルフがおるみたいなんや。見つかって騒ぎにならないに出よう思ってたな。」

ダークエルフは肌の色が黒く、エルフより少し力が強く、逆にエルフより少し魔力が弱い以外はエルフとそう変わりはない。そのため普通の住民には区別がつかない者が多い。幸いこの村はセレス国に近かったためエルフとダークエルフの不仲について知っていたのでリヤスに教えてくれたのである。

「教えてくれたおっちゃんによるとな、一人でセレス国に入国しようとしとるらしい。しかもセイレーンを目指しとるらしい。で、そいつよりも先に着いた方がええと思ってたな。」

何ともまあ物騒な香りのする話である。開戦間近と言われている敵国に一人で乗り込む。

すわ宣戦布告かと男が聞くと、どうやらそうではないらしい。むしろ和平を申し出に行くとのことだったそうだ。

「何と言つか、急展開な話だな。」

『…何かがあつたのだろうか。』

「分からん、分からんから先に着く必要がある。もしくは監視も含めて一緒に行くか、やな。」

リヤスの言葉を聞いてレイが微笑む、その瞬間ラスは立ち上がり一歩引き、リヤスも背中に氷塊が落ちる思いがした。

反応の仕方に経験の差が出ている。

『……何ですか二人ともその反応は。』

「「いや、別に。」」

さつと二人はあらぬ方に目を逸らした。
じつとレイは二人を見つめていたが

『はあ、別に変なことは考えてないですよ。
ただそのダークエルフと会ってみたいな、と思ってただけで。』

（（十分たいしたことなんじゃ……））

ガタ…コツコツコツ…

『部屋に戻っていますね。』

「まで、レイ、オレも行く。」

コツコツコツ…パタン

「……つまりそいつ探して来いってことかいな、しゃあないか、はあ。」

いくらこん村が小さくても一人を探し出すのは大変なんやけどな。」

歴史を紐解き理解せよ

ダークエルフ、それは御伽噺などではたいてい悪役として語られている。

血の気が多く、残虐で、魔物を率いて人を襲う、と。

実際には戦闘好きただけなのだが、そのことを知る人はあまりにも少ない。

大昔、ツンフト国がある所にはとても大きな国があった。

ここではエルフもダークエルフも竜族も魔族も皆それなりに仲良く暮らしていた。

しかし、あるとき突然事態は急変した。

その当時の、当時からハイエルフは希少だった、ハイエルフの王に一部のダークエルフと魔族が突然反旗を翻したのだ。

幸い反乱は鎮圧されたが、王は首謀者によって殺害された。

王は死に際で、ある呪いをかけた。ダークエルフや魔族が自分よりも魔力のあるハイエルフに惹かれるという呪いを。これは禁術と呼ばれる物で、命をかけないといけなかったため、封印され、王にのみ継承されてきていたものである。

事態を重く見た王の一人息子の王子は南東にダークエルフと魔族を、北西にエルフと竜族を、とに分けて暮らさせた。

そして二つに区切るために真ん中に傭兵を雇い、見張らせた。

百年もすれば傭兵たちの世代もかわり、国のようなものが出来始め、ツンフト国へと到る。

やがて、南東にはグリムリ国と、北西にはセレス国となった。

王子は人徳者であつたため、首謀者を殺すことなくグリムリ国初代国王として監視付だが、治めさせていた。

グリムリ国は豊富な海洋資源があるが病原菌が多く、文明もやや遅れている。

とはいえ東西南北の国よりかは進んでいるが。

セレス国は豊かな森に鉱山資源、人材資源など、潤沢に潤っている。そのため長年グリムリ国はセレス国との統合、もしくは侵略を狙っているのが暗黙の了解として浸透している。

現在のグリムリ国王は首謀者の孫であり、高齢、老害の可能性あり。晩年に生まれた双子の息子がおり、兄は出奔し、放浪の旅に出たため、弟が王位に就く予定である。

兄弟仲は良かったらしく、何故いきなり兄が国を出たのかは不明。現在、セレス国に攻め入るために戦力の増強を図っている様子。

『以上、この世界の歴史と常識について、リヤス著』

先ほど食堂を出るときに渡された冊子を読み上げたレイはその分厚さに感心した。

どうやら寝る間も惜しんで書き上げていたようだ。

ほかにもギルドについて、宗教について、魔法関連について、など多岐にわたって書かれている。

「へえ、腐っても学者、か、必要なことばかり書かれているな。」

レイに読み上げてもらったラスはそう評価する。

時間は既に昼に差し掛かり、昼食を食べ終えた頃である。

外に出てみようと思うのだが、リヤスが出かけたまま戻ってこないのも悩んでいた。

まさかダークエルフを探しているとは思ってもいない二人である。レイは好奇心で会ってみたく思っていて、買い物ついでに探してみようと軽く思っていて、ラスもそのことを承知していたのだが、二人との交流が浅いリヤスはダークエルフを連れて来いと言ったと思っただけの間に食い違いが生じていたのだ。

リヤスがダークエルフを探しているとは知らない二人はリヤスを待たずに買い物に行こうかと宿屋の出入り口に向かった。

『何か珍しいものは売っているだろうか？』

「さあ、でも基本ベースは月の王とそう変わりがないみたいだから望み薄だろうな。」

食材とかだけ纏めて放り込んでけばいいんじゃないか？」

『まあ、確かにめばしい物はなさそうだな。』

外に出ると太陽は中天を少し過ぎたほどで、何かの花弁と、春のような香りを風が運んできた。

ざっと見てみると、野菜や果物、家畜の肉などを売っている店が大半を占め、買い物をしている人も大量に買って運んでいるあたり、仕入れをしているようだ。どうやらこの村は食料の村であるらしい。

「武器屋と言うよりは農具屋みたいだな。」

ようやく見つけた武器屋に入ってみると売っている物は鎌や鍬などの農具、斧や弓矢などの猟具ばかりで、隅のほうに大剣が置かれているだけだった。

それを見て、異世界の武器に心躍らせていた武器マニアでもあるラスのテンションはガタ落ち、つられてレイも機嫌が悪くなり、武器屋の店主も何か粗相をしたかとそわそわとしたして、ある意味での異空間が店内に出来上がり、ダークエルフをやったのことで見つけ出したリヤスがその店を通りかかるまでそれは続いた。

「何やねん、この重たい雰囲気は、何かあったんか？」

『逆です。何も無いから落ち込んでいます。』

「あー、この村は野菜とかの産地やからな、他の物とかはあんまり売ってないんや。

そんなことよりほら、言っとったやろ、連れて来たで。」

「は？ 言ってたって、誰をだよ。」

ようやく底辺から這い上がってきたラスが疑問を口にした。

「誰って、言っとったやん、ダークエルフに会いたって。」

忘れたのかとリヤスが幾分か呆れをにじませた声で応じた。

『確かに会って見たいとは言いましたが、つれて来いと言った訳じゃないんです。すみません。』

言葉が足りなかったか、とレイが申し訳無さそうに顔を曇らせて謝る。

「そうやったんか、スマンな、ワイも早とちりしとったみたいやわ。」

両者が謝罪し合うことで丸く収まった・・・かのように思われた。

「ふむ、ところで我のことは無視なのか。」

『「」・・・あ。『「」』

新たな者と交流せよ

話に夢中になり、思わず一緒にいたダークエルフのことを忘れていたリヤスと、リヤスが立っていたので誰かが後ろにいるという認識しかなかったレイとラス。罪は明らかにリヤスにあった。

「いやー、スマンな、話に夢中になっとったわ。」

ははは、と悪びれもせずにリヤスが謝るので男も毒気が抜けたのか、苦笑する。

「かまわん、別に怒ってなどおらん。」

そう言ったのは、浅黒い肌に褐色の髪、闇色の瞳、そして尖った耳、間違いなくダークエルフである。

腰には業物と思われる剣を差している。

「こんな処で何をしておるのだ。目ばしい物など売っておらんだらうに。」

見た目は二十代であるのに随分と古風な言い回しをする男だ、とレイは目を瞬かせる。

しかし、この男の雰囲気には似合っているとも同時に思った。

『確かにそうでしたね、それより、宿に戻りませんか、ええと、あなたも』

「うむ、かまわんぞ。元より貴殿たちと話をするはずだったのだから」

らな、否と言うはずがあるまい。」

男は鷹揚に頷き、店から踵を返したリヤスの後に着いて出ていった。レイとラスも店主に邪魔をしたと告げると店を出た。既に前の二人は宿の扉を潜るところであり、知らぬ間に村を一周してきたのだと解った。

夕食も食べ、お風呂も入り、後は寝るだけとなった四人はレイとラスが取っていた部屋に集まっていた。

「取り敢えず自己紹介や！」

クールで天才なワイはリヤステイナード、ファミリーネームはヒミツ。ま、気軽にリヤスって呼んでや。

そっちの銀髪紫眼の超絶美人がレイ、赤髪蒼眼の美形がラス、ちなみにラスは浅黒い肌やけど竜族やから。

ふたりともファミリーネームは聞いてへんから知らん。

で、お二人さん、こっちは・・・」

「我はガリオス・ディラン・エルゲストという。貴殿らが王都セイレーンに向かうと聞き、共に参ろうと思ひ参上した。」

リヤスの紹介を遮り男、ガリオスは自ら名乗った。

『ガリオスですね、ガルと呼んでも?』

「かまわん、我もレイとラスと呼ばせてもらう。」

「さっきガリオスに説明したんやけど、一緒にセイレーンまで行ってもええか?」

「オレはどっちでもいいぞ。レイも。」

「そうか、ならええわ。」

「じゃあ、もうワイ寝てもええか？ 昨日寝てないからフラフラやわ。朝食食べる時にでも食堂集まって話せばええやろ。」

リヤスの言葉の示すとおり先ほどから身体が右へ左へと傾いていた。

「我もこの宿に泊まっているゆえ、別にかまわん。」

起きるのは早いほうだ。心配するな、直ぐにでも出発できる。」

スマンなー、と言うとリヤスは隣の部屋に引ッ込んでいった。

「リヤスがあんなだからゴタゴタしいことは明日でもいいか？」

「うむ、あの手の者はのけ者になると後でうるさいからな。」

ガリオスは誰かを思い出しているのか苦笑する。
似たような人を知っているようだ。

「では、我も戻るとしよう。また朝食の場で。」

『あ、はい。おやすみなさい。』

「ちゃんと休んどけよ、明日は多分ハードだからな。」

「あい、分かった。」

ガリオスが出て行った後も二人は話をしたのだが、明日は村を出て

始めての旅となるので、英気を養うために程々に切り上げて就眠した。

- - -

今日はリヤスから歴史と常識について書かれたノートを買った。

明日、少し早く起きて読んでみよう。

ダークエルフのガリオス、ガルと会った。古風な言い回しをする人だった。

どうやらリヤス同様独特のものらしい。

明日からセレス国の王都セイレーンに向かって旅立つ。
準備は万端だ。足を引っ張らないように気をつけよう。

- - - 《異世界譚・二日目》

番外 妙なる魅惑に酔い痴れる

その日、エルザはいつもと同じようにベッドから身を起こした。

「ふわあ、うんいい天気。何か良いことありそう。」

父親とテーブルに座り、母親の作った朝食を食べる。

「そういえば、昨日は宿屋の方が騒がしかったな、また酔っぱらいが暴れたのか？」

「いいえ、違うそうですよ。なんでもリヤスさんが知らない人を連れてきたそうで、しかもリヤスさんよりも美人らしくて、娘達が集まっていたそうです。」

母親の噂話を話半分に聞き流しながら、エルザは思う。

（また母さんの噂好きが始まった。リヤスさんよりも美人なんてそうそういるわけないし、リヤスさんが知らない人というのが珍しくて出来た噂でしょ。）

食べ終えた後も母親の話は続き、結局、自分で皿洗いをする羽目になった。

（あーあ、せっかく良いことある気がしたのにな。はあ、）

片付けも終わって家族で団欒をしていると扉が叩かれた。

「それでね・・・あら、誰かしら、まあ、リリスちゃんじゃない、どうしたの？」

「おはようございます、エルザのお母さん。今日はエルザと木の実を採りに行く約束をしていたの。」

「そういえば、そういう話を聞いたわ。エルザ、準備は出来たの？行ってらっしゃい。」

「行つてきます。昼には帰ってくるから。」

母親が扉に近付いて行っている間に部屋に戻っていたエルザは直ぐに戻ってくると机に置いていた籠を持って、家を出た。

「エルザ、聞いた？リヤスさんの噂？」

「ああ、聞いたけどきつと嘘よ、リヤスさんはエルフ族でも上位の人よ。そんな人よりも美人がこんな村に来ると思つて？」

「確かにそうだけど、でも想像するのはタダよ。」

ハイハイと親友を宥めながらもエルザはどうしてリリスの方が自分の母親に思考が似ているのか悩む。

もつとも、母親に言わせればエルザは父親似らしいが。

「それより、今日は籠一杯まで採るわよ。」

手を握り締めて目標達成に燃えるエルザと

「はい、頑張りまーす。でも昼までだからね？」

気楽に半分以上あればいいかなと思っているリリス。性格は反対だが二人は親友だ。

「これくらい採ったらいいかしら、丁度昼頃だし、リリス、帰りましょう。」

数時間もすれば籠も一杯になり、二人は何時ものところで採ってきた物を売り払った。

「今日は沢山採ってきたね、少し色を付けてやろう。」

「本当に？ おじさん、ありがとう。」

「いってことよ、またよろしく。」

思っていたよりもお金を貰えて二人はご機嫌で歩く。

もうすぐ昼になるという頃で、二人は昼食に間に合うように急いでいると。

「そこの二人、少しいいか？」

内心良くない！ と叫んだエルザだったがリリスがはい、と返事をしてしまったので渋々と振り向く。

「この辺りに武器屋を知りませんか？」

何分この村に来たのが昨日なもので、土地勘が無いんです。」

そう言った人たちはこの上も無い程の美貌を持っていた。

最初に話しかけてきた人は焰のような髪に深い海のような蒼眼。

質問をした人は月の光を集めたかのような銀髪にアメジストのよう

な眼。

見とれながら、まるで太陽と月のようだとエルザはぼんやりと思った。

「・・・ザ・・・エルザ！」

見惚れるのは分かるけど、質問に答えなくちゃ駄目よ。」

（分かっているけど、無理なものは無理なのよ！）

注意を促され、我に返るエルザだったが、驚きすぎて正常に頭が働かない。

スーハー、と深呼吸をしてやっと全力疾走していた心臓が落ち着いた。

「あ、う、うん、大丈夫です。」

武器屋は向こうの、いえ、付いて来てください、案内しますから。」

家の近くですからお構いなく、とりリスが補足する。

すると、場所を聞くだけでいいと断っていた二人もそれならとエルザの後について歩く。

「私はリリス、こっちは親友のエルザっています。」

お二人のお名前をお聞きしてもよろしいですか？

あ、リヤスさんといった美人な人たちってお二人のことですか？」

リリスの猛攻撃に引いていた二人だったが、意外にも質問には答えてくれた。

「私はレイ、彼はラスといいます。」

リヤスと一緒にいたというのは私たちのことだと思いますが、美人

かどうかは。」

そう謙遜するが誰が見いてもレイは美人だった。

（ていうか、その顔で美人かどうか分からないって・・・やっぱ毎日見てたら耐性でも付くのかしら？）

「レイは美人だ、オレが保障する。
だからもつと自信もて。」

（ラスさんも美人、いや美形？ レイさんは男？ 女？ 中性的だなあ、話し方とかは女性的だから女性かな。二人とも綺麗だからお似合い、いいなあ。リリースが暴走しないか心配。）

（右目にレイさん、左目にラスさん、目の保養。うわあ、最高の贅沢かも。）

「つと、あ、ここです。」

でも、全然武器とか売ってないので期待しないほうがいいですよ。」

和気藹々と話をしている間に武器屋に付いてしまった。

（ああ、もう！

なんでこんなに近いところにあるのよ！）

「ここ？ 小さいですね。」

ありがとございました、これではきつと見つけれなかったですよ。」

レイがそう言うとラスも同意した。

二人が店に入って行ったので、名残惜しみながらもエルザとリリースは家に帰った。

「いつかまたあの人たちに会いたいね、エルザ。」

「当然よ、あんなに目立つんだからきつと噂になる、そこに行けば会えると思うわ。
それに・・・」

「私たちはエルフなんだから。」

「人間よりも行動力はあるのよ？
その力を使わずにいつ使って話ね。」

「お母さんたちがエルフでよかったね、変わり者って呼ばれた甲斐があったわ。」

「ホント、こんな辺鄙な田舎に移り住むくらいだしね。」

「王都に向かうって聞き出しといて良かったわ。」

「ナイスよ、リリース。」

「エルザもね。」

こうして知らぬところで未来のセレス国諜報部のエースたちの腕は磨かれていた。

違和感に気付き思考せよ

『・・・セレス国では、イリスシュタイン虹晶や魔石、ダイヤモンド等の宝石などの鉱山資源のほかには野菜類や畜産などの食物資源、さらには歴史的建物や景勝地などの観光資源と、ほぼ完璧な国である。

しかし、国王不在のため国内の出生率がここ数十年減少の一途を辿っている・・・？

なぜ王がいないと出生率が低下するんだ？

・・・またグリムリ国では・・・。」

ラスが起きたときには既にレイがリヤスに貰った冊子を開き読んでいた。

新しいページを読んでいるようで、ラスには聞き覚えがない。

「はよ、レイ、どうだ、飲み込めたか？」

『おはよう。だいぶ、豆知識とかも書かれてて面白かった。うん、満足。』

満ち足りた猫のように目を細め、レイはそうのたまった。

『朝食ならもう出来てる、いま解除するから食べて。』

テーブルの上には出来たばかりに見える料理が置かれていた。不思議なことに湯気が出たまま固まっている。

『タイムストップリリース
《時間停止解除》』

詠唱することなく短縮されたそれは短縮呪文と呼ばれる物で、通常よりも多く魔力を使うためあまり多用されない、しかも、時間や時空に関するものは例外以外は上級魔法に属する物である。スピードスベル
ラスでさえ、《時間停止》タイムストップ 以外は詠唱するのが基本だ。《時間停止》タイムストップ は何故かLv300を超えれば簡単に使えるようになる。

そんなものを片手間に、しかも朝食にかけるなどという他人が見れば説教物だが、ラスも似たようなものなので気にしない。
こうして二人の非常識は誰にも知られぬ間に続いていくのだった。

「おはようさん。もう快眠やったわ。
んで、ここで話すか、部屋で話すか？」

二人が食堂に向かうとリヤスとガリオスが朝食を取っていた。
リヤスは昨日と同じオートミールのような物を、ガリオスはパンに野菜と肉を挟んだ物を。
先に食べ終わったガリオスが食堂を見渡し、ため息をついた。

「我としては部屋で話したい。ここでは少し話しづらい。」

「わはった。あつまふとしたらお二人さんのとほがいひばんひろひからほほでいいな？」

食物を口に含んだまま話すので聞き取りづらいことこの上ない。
ガリオスにいたっては顔をしかめて心持ちリヤスから離れている。

「マナー違反だぞ。んでもってオレらの部屋だな、分かった。先に行ってるからゆっくり食べてから来い。」

ガリオスも一緒に。」

「む、ならば一度私の部屋に寄ってもらってもよいかな？ 今日立つのだろう、荷物を持ってゆく。」

イスを引いて立ち上がったガリオスは朝食を返してくるとそう頼んだ。

勿論三人に断る理由など無かったので、リヤスを残し、ガリオスの部屋に向かった。

「ここだ、入ってくれ、すぐに仕度する。」

ガリオスはそう言うと、広げていた地図や筆記具を片付けていった。ラスは腕を組んで見守っているだけだったが、レイは触っても差し障りもなさそうな物をガリオスに渡している。

「これは・・・？」

レイがふと取った物は二人には見慣れない形をしていた。

なんとなく腕に付けるリングだとは思うのだが、短い間に感じたガリオスが実用性の無い物を旅に持っていくとは考えられなかったレイには不思議に思う。

銀色の美しい二つ揃いの三連のリングは互いに繋がっており、腕に潜らせることが出来るようになっていた。

「それが、それは腕に付け、剣を受け止める時に使う物だ。

見た目がアクセサリーだから誰も気にしないと思って持ってきたんだが、我には似合わないし、不要の物だと旅立った後に気付いて処分に困っている。

そうだな、レイ、レイなら似合うと思う、貰ってはくれないか、繊細な見た目に反して頑強な作りになっているから。

レイは後衛型だろう？ もしものために付けるといい。」

受け取ったりリングを再びレイに渡そうとするが、審美眼が確かなレイには高価な物だと分かるため首を横に振った。

（冗談ではない、そんな高価な物を貰えるか。）

「レイ、貰つとけよ、どうせ受け取らなかったら捨てるつもりだぜ。」

レイの心情など知らず、気楽なラスの言葉にガリオスは無言で頷いた。

やはり、無駄な物は持たない主義のようだ。

「うむ、さよう。受け取らないなら捨てるぞ、どうする？」

ニヤリと意地の悪い笑みをみせ、レイに形ばかりの選択を迫る。

『（この狸共め！）うう、分かりました。ありがたくいただきます。』

納得がいかないまでも、レイはリングを受け取り、左右の腕に付ける。

潜らせるまではレイには大きかったリングが付けると縮み、ピッタリとあった。

魔法が掛かっていたようだ。

そういう魔法を知っていた二人は気にならなかったが、なぜか元の持ち主であるガリオスは気付いていなかったようで、驚いている。

「む、そんな魔法が掛かっていたのか、どうりでピッタリと合ったわけだ。」

謎が解けたとばかりに頷くガリオスに二人は釈然としない思いを抱く。

「さて、これで仕舞いだ。さあ、ゆこう。」

新しき世界に羽ばたけ

荷物を片付け終わったガリオスは手を叩き、退出を促す。

レイとラスの部屋に赴くと、リヤスが部屋の前で待っていた。

「遅いで、待つとったんやで、はよ入れてえな。」

どうやら朝食を食べ終えた後、部屋に戻って荷物を取ってきたようだ。

足元に荷物が置いてある。

「幸いなことにワイらは皆、高い戦闘能力を持つとる。」

部屋に入り、全員がイスに座るのを見届けると開口一番リヤスが言った。

確かにガリオスはともかく他の三人はそれぞれ分野は違うが一流である。

レイとリヤスは種族の特性を活かした魔法、つまり中、遠距離、ラスは竜族の高い身体能力を発揮できる近距離を得意とする。

もちろんレイは近距離、ラスは遠距離をやってやれないことはないのだが。

そして、ガリオスは見た目、腰に佩いた剣などをみるからに、近距離が専門のようだ。

「うむ、皆、^{つわもの}強者の気を感じよる。

戦闘の時は我とラスが出て、レイとリヤスに後方支援を頼みたい。

よいか？」

「ワイはかまへんで、戦うんは専門やないさかい。」

『私もかまいません、ラスも良いそうです。』

「そうか、ではそのように動こう。」

ところで、王都セイレーンへの道は決まっておるのか？」

すると、リヤスがテーブルの上に丸めて置いてあった地図を引き寄せ、全員が見れるように真ん中に広げた。

そして、おそらくこの村の辺りであるところに指を置き、北寄りに進路を取りながら王都セイレーンと書かれた場所まで指を滑らせた。

「今の時期は東の国でデカイ祭りがあるからな、人がぎょうさん集まっとるはずや、あんま見つからんためにも北のほう通るで、このパーティーやったら北国の魔物にも遅れは取らへんやろ。」

それにこの村はセレス国に近いから通るって言っても数時間で抜ける道や。」

あまりピンときてないガリオスには分からないが、覚えのあるレイとラスには苦笑しか出なかった。

北国の魔物、通称月の王の無理ゲーと呼ばれる魔物の群れなのだが、上級者用で当然強い。

特に、二人の好む冬季の雪山では他では所謂ボスキャラにあたる魔物がゴロゴロと出てくるので、レベルアップやお金集めには最適なのだが相当の實力がないとあつという間にやられてしまう。

そんな場所に気軽にまるでピクニックのように行く二人はプレーヤーたちからは呆れと尊敬の目で見られていた。

とはいえ二人も始めて行つたときは流石に焦つたが。

大声を上げて雪崩を起こしながら追いかけてくる3メートル以上の雪男、その雪崩にまるでサーフィンするかのようになりながら追ってくる人鳥ペンギンのような魔物、ただし車と同じ大きさ。

負の連鎖のように巻き起こつたことを思い出して笑う二人だった。

『確かに今の時期なら冬も過ぎましたし、魔物もあまりいないでしょう。』

レイがそう同意するので通るルートは決まつた。

というのも、ガリオスはどうでも良かったし、ラスにいたってはレイに任せているからだ。

「じゃあ、さつさと出発しようぜ、夜になるまでに雪山んとこの近くに着いておきたいしな。」

「それはワイも賛成や、今からやったらギリギリなんとか着くと思つて。」

リヤスはそう言うときさあさと三人を急かして部屋の中に置いてある荷物をまとめさせて宿屋から出た。

時間にして約20分、何故その速さを普段に活かせないのかとリヤスは悔しそうに三人に語つた。

何でも、買い物をする時などはそのスピードが出せるらしい。

「まるで某食い倒れの県のおバちゃんみたいだな。」

『え？・・・確かに、テレビとかで見る人たちはそんなかんじかもしれない。』

雪山へと到る道の途中、ふと思い出したラスが呟くと、偶然聞こえたレイが同意した。

すると、地獄耳なのかリヤスが寄って来た。

「なんや、お二人さん、どうかしたんか？」

『「なんでもない（です。）」』

「？」

「ふむ、知らぬ方が良いということもあるということか。」

ガリオスがなにか悟ったのかウムウムと頷いた。

分かっていないリヤスは困惑している。

「なんやねん、おバちゃんって、ワイとどう関わりがあるんや！」

とうとうリヤスが騒ぎ出したが、二人から答えを聞き出すことは出来なかった。

万年雪を融かし尽くせ

「轟け雷鳴、天に在りし莫大なる力よ、其の一筋の光を我らの敵に
落とし給え。《雷槍》！」
サンダーランス

雪山にて、敵が現るごとに戦闘態勢を取るのが面倒になったレイ達は、レイが詠唱している時はラスが、リヤスが詠唱している時はガリオスが護衛するという形に収まった。

レイに至っては詠唱を前もってしておき、術を保留状態にして、魔物が出ると最後の術名と唱えるという離れ業を披露していたが。

術を保留するということは想像以上に難しいというのが常識である。集中力が途切れると途端に術は消失してしまうし、魔力も一緒に消えてしまうからリスクが高く犬猿される傾向にある。

幸い魔物が大量発生する時期は過ぎていたので大怪我を負うこともなく、順調に進んでいた。

『プリズムバレット
《光弾丸》！』

そうこうしている内にも二メートルはあるかという一匹の雪狼が襲い掛かってきた。
スノーウルフ

「可笑しいで、雪狼は普通群れで狩りをする習性があるんや。一匹
であるなんて・・・。」
スノーウルフ

ウオオオーン……

慌てて声のした方を見ると、四人がいる所より少し高い崖の上から
スノーウルフ
雪狼がこちらを眺め、空に向かって遠吠えをした。

「マズイな……。」

「何か不都合でも有るのか？」

『スノーウルフ
雪狼が遠吠えをすると最低でも九匹は集まってくるんです。
時には他の種族の魔物も。』

…ウオォー

遠くの方から近付いてくる雪狼の鳴き声。
スノーウルフ

「確かに、これは少し、難儀だな。」

『考えがあります。どうにか一ヶ所に集めてください。
出来ればあの崖の辺りに。』

レイが指差したのはちょうど崖の上になっており、万が一足を滑ら
せたら谷間にまっ逆さまに落ちていってしまうだろうと思われる場
所である。

「谷間に落とすんやな、よっしゃ、一丁やったるやないか、ラス、
ガリオス、援護は任しとき！」

「オイ、お前はやらねえのかよ！」

「右に同じく。」

「何を言つとんか、せえへんに決まつとるやる。
こないなお年寄りに何をさせようっていうんや。
あー、ゴホゴホ。」

ラスは今までまだ見ぬ敵に威嚇も籠めて向けていた殺気をリヤスに
向けた。

『・・・何といますか。』

「下らぬ。」

言葉を濁すレイときつぱりと切り捨てるガリオス。

ウー！ グルルア！

ふざけたことを言い合っていたが戦闘態勢に入った。

「1、2・・・12匹か、レイ、リヤス、身体強化を、ガリオス、
オレが突っ込むから二人に行きそうなヤツだけ頼む。行くぞ・・・
3、2、1！」

ラスはレイの魔法が身体に掛かるのを感じながら一気に加速をかけ、
群れの中に躍り出た。

スノーウルフ

襲い掛かってくる雪狼を時に切りつけ、時に吹き飛ばし、少しずつ
目標の場所まで誘導していく。

スノーウルフ

レイたちに向かってくる雪狼はガリオスが防ぎ、その間に魔法を完
成させたレイとリヤスが仕留める。

もう少しで目標に着くだろうという時にレイが深く息を吸ってから
呪文を唱えだした。

明らかに今までに繰り出していた下級魔法ではなく上級魔法、もし
ロウアーマジック
くは古代魔法かと思われる魔力の膨れ上がりだ。
エンシェントマジック
思わずリヤスは呪文を中断してレイの方を振り返ってしまう。

（なんちゆう力や、こんなけつたいな量の魔力、感じたことないで・
・・！）

リヤスがそんなことを考えているとは露とも思わず、レイは詠唱を
続ける。

『・・・・空に散り逝く雪花、降り積もりては万年雪、永らく支え
かいな
し腕よ、今その力を緩めよ。

ラス、戻れ！

総てのものを飲み込め、
アヴァランシエ
雪崩！』

レイが詠唱し終わると山頂の方から土煙、いや雪煙が現れ、瞬く間
スノウルフ
に目の前の木々は薙ぎ倒され、雪狼と共に飲み込まれていった。

「・・・・・」

「おー、レイのアレ、久しぶりに見たな。」

『威力は大きくても雪山じゃないと出来ないからな。』

二対二での二極化、二人は思う。

（・・・こいつら本当規格外！

ラスも後一步遅れていたら巻き込まれていたぞ、それでいいのか！）
）

と、しかしながら、その思いは太陽と月には届かなかった。

そして更にリヤスは思う。

アヴァランシェ

（雪崩って、確かアホみたいに魔力使うから生命に関わるって理由で禁術指定されてはったような・・・
うん、考えたらあかんことやな。）

周りの、正確には約一名の精神衛生に関わるリヤスの心の内での呟きは、丁寧に深淵へと仕舞われた。

雪路を抜けて春を告げる

「それにしても、このあたりの魔物は強いな。
北国はよくやっていける。」

思わず、というようにガリオスが呟くと、皆、程度は違えど同意した。

そのくらいこの辺りに棲む魔物は強く、この四人でなければ旅人たちには脅威となったであろう。

現れる魔物は大きく、強力な爪や牙、毒を持っているのが大半だ。皮膚も硬かったり、厚い毛で覆われていたり、防御力もハンパ無い魔法に若干弱いというのが唯一の救いである。

「そりゃあな、北国の住民らはよう考えてはるで、家は堅牢に、守りが堅い。」

何より国に住んだる奴の半分が戦う術を持つとるってことがこの国に住める要因やろな。

すごいで、この国の住民は、包丁で戦うおばさんとかな。

ただ、その包丁がどうなっただんかは知らへんけど、知りとうないけど。」

そう言うのも、以前、リヤスが視察で訪れた際に、偶然滞在していた村が魔物に襲撃され、村人たちが応戦、リヤスも援護をと手助けを申し出、詠唱中に護衛をしてくれていたのが泊まっていた宿屋のお上さん、笑顔で寄ってきた魔物を切り裂く姿はリヤスにトラウマに近いものを与えた。

そのおかげで一時期、リヤスは女性恐怖症に陥った。

曰く、

「全ての女性には二面性があり、その仮面が剥がれると怖い。」

あながち間違いではないかもしれない。

『ところで、グリムリ国ってどういうところなんですか、書物で読んでもイマイチ想像がつかなくて。』

「ああ、ダークエルフと魔族は好戦的だ、セレス国を狙ってる、とかばっかだな。実際はどうなんだ？」

グリムリ国のことを載せている書物では、グリムリ国の成り立ちが悪かったことから印象が悪い。

「ふむ、そのように言われておるのか。そうだな、好戦的というよりは血の気の多い奴らだな、殺戮が好きというわけではない。セレス国を狙ってるというのは間違いだ、いや、間違いになったというのが正しいか。」

ガリオスはセレス国の辺りについては真剣に話した。

「どういうこっちゃ、ワイが知つとるんはグリムリ国王がセレス国に執心つちゅう話やで、そんな、諦めるとは思えへん。」

慌てたようにリヤスが割り込む、よほどの自信があるようだ。しかし、レイには何となく事情が読めてきた。

突然のグリムリ国からセレス国への使者、先ほどのガリオスの物言
い。つまり、それが示すこととは。

『つまり、グリムリ国王は。』

「御崩御なされた。もともと高齢であられたからだろうか、風邪で
あつさりと。」

そういうわけで王の長子が王位を継ぎ、反国王派だったこともあり、
これを期に陛下はセレス国と友好関係を結びたいと和平の使者を出
すことになったのだ。」

言い終わるとガリオスは誇らしげに左胸の辺りを手でなぞった。お
そらくそこに和平のことを記した封書があるのだろう。

ガリオスのような者が誇らしげにするのだから新しい国王はきっと
素晴らしい人物なのだろうとレイは漠然と思った。

いろいろとガリオスからグリムリ国について話を聞きながら歩いて
いると、足元の雪道に所々土が現れてきた。とうとう雪山を抜ける
ようだ。心なしか出没する魔物も少なくなってきた、その毛の厚み
も薄れ、剣での攻撃が効くようになってきた。

さらに歩いていくと、無数の雪解け水の小川が出来たりしていて、
草も少々生えている。風も先ほどまでは吹雪だったのに今では嘘の
ように春風を届けている。

花々の中に一際異彩を放つ花があった。

「このような草花はグリムリ国では見たことがない。」

「セレス国では北の方で群生しとるで。確か優れた薬になって、ハイポーションにも使われとるよ。そんな理由かは知らんけどセイレーンの王城にも春を告げる花として北方花壇に植わつとるし、北玄騎士団の隊花がその花や。花言葉が忍耐やからその名の通り防御力が一番高い隊や。花の名前はパシエンシア。綺麗やろ。」

パシエンシア、パシィとも略される花は、一見儂げであるにも関わらず、触ってみると意外に硬く、引っこめくのにかかると。根っこが三メートル以上というのは開いた口が塞がらない。

「もうちょい行ったり山を越えて来る人のために山小屋があるはずやから、そこまで頑張ってくれや。」

「山小屋、やっと休めるんだな、日も暮れそうだし、急ごうぜ!」

異世界最初の料理を作れ

「こん中で料理出来るヤツおるか？」

ワイはヘタクソやから頼みたいんやけど。ガリオスも下手そうやな。

「

歩きながら、リヤスは言い出した。夕暮れが近づき、お腹が空いてきたようだ。

「うむ、一度食堂を爆破させてから調理場への出入りを禁止されておる。」

いったいどんな料理方法をとったら爆発など起きるのだろうか。教えて聞いてみる者はいなかった。

「論外、だな。しょうがない、オレがやる。レイ、手伝ってくれるか？」

「ん、わかった。」

ラスは自炊できるだけの腕はあるし、レイは副業の一つに料理之達人^タの称号を取っている。そうとう美味しい物が出来上がることは想像に難くない。

そうとも知らず、二人は、レイはともかく、ラスが作ったら野菜の形とか不均等に切られてそうやな、うむ、火がちゃんと通っているなら我慢しよう。などと不安がっていた。

「悪かったな、料理出来なさそうで！」

「何を怒っておる、別に料理が出来なくとも恥じることはない。」

「決め付けんな！」

「そうやで、もしかしたら出来るかもしれへんで。」

『もし、ってあたりが信じてませんね、目が笑っていますよ。』

ガリオスに言ってくれたリヤスだが、信じていないのは明確で、笑いを堪えるためか、顔が強張っていた。

『ラス、シチューとかでいいと思うか？』

ラスの隣で大人しくしていたレイは何を作るか考えていた。

それを聞いてリヤスがニンジンはいれんといてな、と頼み、ラスに怒られていた。同じくニンジンが少し苦手なガリオスは寡黙なおかげで気付かれずにすんで安心していた。

幼いころはニンジンが苦手で、ラスに無理やり食べさせられた経験のあるレイは苦笑いを浮かべて二人の言い合いを眺めている。

「料理にはニンジンを入れる！ 残したら……覚悟しろよ。」

「そんな、堪忍してやあ。」

どうやら言い争いはラスの勝利で収まったようだ。リヤスはいじけて縁が黒く、中心に向かって白くなってゆくパシエンシアの花を干切っては集めだした。蕾に近い花ばかりを摘んでいるあたり何か意

図があるようだ。

レイもそれを見て、ハイポーションを作るために、根元から短剣、
トルボックス何故か道具箱の中にラスの物が入っていた、一応最高級品、で切り取っては放り込んだ。

「あ、それ結構値打ち物、あ、土と汁が…」

『どうせ、一度も使わないくせに。』

「まあ、そうなんだけどさ。」

『ならば問題なし。』

ザク、ザク、ザク

「そうなんだけどさ、やっぱ、こう、くるものがあるというか。」

「分かるぞ、その気持ち、剣士として切ないものがあるな。」

「へえ、ワイは剣士とちゃうからわからへんわ。よう切れる刃やなあ、ぐらいしか。」

そういつて意気消沈している剣士二人の気持ちが理解できないリヤスは無意識に追い討ちを掛けるようにレイに短剣を貸してもらい薬草を切り取った。

二人の若干間違った花摘みが終わると、再び歩き出した。

二十分も歩けばそこそこの大きさの山小屋が見えてきた。無駄な装

飾は無く、つくりがしつかりとして頑丈だ。

内も防湿機能がきちんとしているようで、外よりも暖かった。

『たぶん、ここで料理をするんですね。』

部屋に置いてあった箱を覗きこみながらレイが言葉を発した。料理をするために必要な料理道具の一式が木箱に納まっていた。

「そやで、そんなかのもんは何使つてもええんや。便利やろ。」

『そうなんですか、いいですね。ラス、何を作るんだ？』

「シチュー系で、ミネストローネ。ボルシチ、ポトフ、クラムチャウダー、どれがいい？」

『ん、クラムチャウダーかな。』

「分かった、材料を揃えるな。」

次々といろいろな国の代表的なシチューの名前を出して、尋ねると、レイは一瞬考えたが、ちらりとリヤスとガリオスに目を移してからクラムチャウダーを選んだ。

ミネストローネやポトフ、ボルシチは普通ニンジンを使うので、リヤスのニンジン嫌いを思い出し、ひそかにガリオスも反応していたことに気付いていたレイはクラムチャウダーにはあまり入っていないだろうと推測した。

「レイ、アリガトさん。」

ラスの下に向かうレイに近づき礼を言つと、気付きましたか、と苦笑を浮かべた。

未知の領域に歩を進めよ

この世界での料理法は大きく別けて二種類ある。

一つは、直接切って、煮て、焼いて、ようするに普段とかわりない料理法である。

もう一つは、料理スキルを使って短縮するというやり方だ。

こちらは時間が掛からないが、若干直接作った時よりも味が劣ってしまうので、もっぱら料理の上手な人や、忙しい時にしか使われない。

今回は疲れているので後者の料理法を取ることにした二人は、手慣れたように食材を適当な大きさに切ってゆく。

『どちらがやる？』

「レイの方が料理スキル高いからレイで。」

『ん、分かった。クウイズイン料理』

二人に切り刻まれた食材がフワリと浮き上がり、淡く発光した。食材は集まると回転し出し、一瞬強く光ると目の前にはシチュー皿に入った四人前のチャウダーがでんと置かれていた。

同じようにパンやサラダを作り、後片付けをした。

まだ湯気の立っている料理を運び入れると、腹が減っていたのだろう、リヤスとガリオスは歓声を上げた。

無理もない、今日一日歩いていたのだから。

料理の味は好評だった。是非またの機会に食べたいとまで言われて、ラスもレイも満足した。

そのあとは代わる代わる風呂に入り、二つあった寝室を当然の如く二人（レイとラス、リヤスとガリオス）ずつ分け、早々と四人は部屋に籠もった。

ラスはさっそくウィンドウを開くと、武器を出したり道具を出したり、果てには指先一つで喚び出せる小モンスターを喚び出したりしては首を傾げていた。

やっていることがムチャクチャなラスにレイは疑問を浮かべるが口には出さず、日々の日記を綴った。

《今日一日で大分進んだ。危険な道だったから早く通り抜けたかったそうだ。

そのためだろうか、明日からはペースを落とすらしい。これから何事もなければ一週間ちよつとほどでつくそうだ。

パシエンシアの花を使ってみたところ上質のハイポーションが出来た。これは結構役にたちそう。

明日は皆より早く起きて散歩がてら摘んでおこう。山小屋の辺りには魔物の気配の気配もないし一人でも大丈夫そうだ。

さて、さすがに明日も早いのでそろそろ筆を置くことにする。《

李下で冠を正すな

キィ……パタン……

「う……朝、か。」

む……あれはレイ？」

ガリオスが何者かの気配が遠ざかるのを感じて目を覚ますと、朝霧の立つ中、レイがしゃがみ込んで露に濡れるにも関わらず、手をつけているのが目に入った。

ガリオスからは詳細が見えなかったが

レイは昨日摘もうと決めていたパシエンシアの花や、リアルではお目にかかれないような珍しい種類の花を摘んでいた。

「何をやって、おるのだ……？」

そのことを知らないガリオスは、手をつけているので、もしや体調でも悪いのかと心配した。

後に誤解は解けるのだが、この時のガリオスはレイがエルフだと思っていたのだ。

いくら魔力が強かろうとも、レイの身体つきはまだリヤスのように大人ではなかったこと、また、エルフが他の種族より身体が弱いことを思い出し、あわてて服装を整えると部屋を出て、小屋から出ていったレイに近付いた。

花に夢中になっていたレイが足音に気付いて振り返ると、ガリオスが走り寄って来るところだった。

何故、走っているのだろうか、とぼんやり見ていると、おもむろに腕を掴まれ、そのまま詰問するかにように問われた。

「レイ、この辺りは朝冷えするのに、どうして出てきておるのだ。ぼんやりとしていたが、もしかどこか体調が悪いのか？」

あいにく我は回復系の魔法が不得手なのだ、リヤスを呼んでこよう。いや、運んだ方がよいのか？ 失礼する。」

そのまま、ガリオスはレイを抱えあげようとして腕を伸ばした。

ガリオスの焦ったような顔に驚き、啞然として聞いていたが、どこも悪くないレイは慌ててガリオスの腕から逃れようと身体を擦った。

しかし、ガリオスの反射神経はさすが、すばらしい物で、たやすくレイの抵抗を封じると身体に負担を掛けないように、首と膝の下に手を回してヒョイツと横抱きに抱き上げた。

レイはまさかこうされるとは思ってもいなかったので、顔を赤く染めた。

『ガルツ、ガリオス！ 誤解です、違います。私は別にどこも悪いところなんてありません。』

薬草を摘んでいただけです。』

「摘んでいた？ うずくまっていたのではないのか？」

『はい、そうです、ガル、誤解なのです。』

だから、どうか私を降ろしてください。この格好は、少々恥ずかしいです。』

誤解を解くためにガリオスの鍛えられた腕をペシペシと叩きながら必死に言うつ、なおも納得がいかないように渋りながらもゆっくりとガリオスは地面に降ろした。

レイは近くに生えていた薬草を手早く十本ほど摘むと、それを黙って見ながら所在なさそうに佇んでいたガリオスに薬草を見せた。色とりどりの草花だが、その全てが魔法薬の材料になるものだった。

「ほう、薬草学に精通しておるのだな、我にはよく分からぬが、かろうじて、分かるのはそれくらいか。」

と、ガリオスが指差したのは薬草の中でもわりとポピュラーなもので、おもに初級から中級の調合に使われることが多い。

「騎士団に入隊すると、礼儀作法や学問などのものはだいたい全てに関する基礎を学ばされるのだ。」

我はとある事情で文官も武官も兼ねておるから、初めは慣れるのに苦労した。

その時の知識からすると、これは確か、毒消し、だったか？」

「ええ、正解です。」

より詳しく言うつ、この薬草は毒消しの中でも特に、動物性の毒によく効きます。そして、植物性の毒にはこちらの……」

その後もレイは薬草を摘み、ガリオスはそれを持ったりして手伝っていたが

朝霧も次第に晴れてきたので、キリのいいところで二人は山小屋の中に入ってしまった。

『朝はパンになりますけど、よろしいですか？
お嫌なら、なにか作りますけど。』

レイが焼きたてのパンを釜から取り出し、大きめの竹籠に入れながら尋ねた。

小さめの竹籠には数種類のジャムとバター、マーガリンも出していた。

「ワイはオートミールがええなあ、なんて言ってみたりして。」

すると、レイは出て行ったがすぐに戻ってきた、手にオートミールの入った皿を持って。どうやら先に用意していたようだ。

「あー、美味かった、ごちそうさん。ホンマ、レイは料理上手いな、ええ嫁さんになるわあ。」

『嫁、ですか？』

「せや、嫁や！

つと、今日から一週間はずっと野宿になると思うで、ずーっと山、山々なんやねん。

食料はセレス国に近いんやから、豊富にあるとこやから心配せえへんでええんけどな。

ん、なんや、どないしたラス。」

「山ばかりで何もないんだったら、人目も気にせずにいられるん

だから飛んでいけばいいんじゃないか？」

「飛ぶ？ あかんあかん、そんなちつぽけな距離やないんや。」

「竜族はそんなに長時間飛行が可能なのか？」

「や、確かに竜族はエルフやダークエルフより長時間飛行が出来るけど。」

オレが言いたいのは自前のそっちじゃなくて、召喚獣とかさ。」

「「召喚獣！？」」

「レイ、オレ、おかしいこと言ったか？」

『さあ、私には別になにも。』

「だよなあ。」

幼馴染の少年二人は大人二人が絶句する中仲良く首を傾げていたのであつた。

血に依りて獣を喚び出せ

数ある副業の一つに《猛獣遣い》ワイルドアニマルトレーナーをもつラスは最高レベルまで錬度を上げている。

たとえ、Sクラスの幻獣であるヴリトラなどのドラゴンでさえ、周囲への被害を考えなければ乗りこなして見せるだろう。

常に一緒にいるレイもけつして少なくない経験値を与えられていたのでBクラスくらいまでなら大丈夫であるが、同じなのは面白くないとレイは似たような副業の《調教師》テイマーを最高レベルまで上げたというのは余談だ。

ちなみに、《猛獣遣い》ワイルドアニマルトレーナーと《調教師》テイマーのちがいはラス曰く、“倒して従わせるか、誑たして従えるか”らしい。

ゲームでは、自分だけのモンスターを持つことはさほど珍しくなく、一種のステータスとなっていたため、二人にはどうしてそこまで驚くのが分からない。

しかし、ガリオスとリヤスには召喚獣を持つことの稀少性が十分過ぎるほど分かっていた。

手紙を運べるほどの大きさの鳥型モンスターなら要職についている人物などはよく愛用しているが、人を運べるほどの大型になると数は激減する。

大型でなければならぬ、殺してはいけない、人に慣らさなければならぬ、などの三重苦となるため、必然的に国に二人、三人、セレス国でさえ十人に満たない。

それなのに四人も乗せられるようなモンスターを喚ぶつもりなのか、この非常識が！

という念を込めた目でガリオスとリヤスの二人はラスを睨み付けた。

睨み付けられた方のラスとしては、何故？ と思い当たることもなく困惑した。

相互理解が深まるには、まだ早いようだ。

「で、どうするんだ？」

「ええい、ままよ、好きにすれば良い。我はもう何も言わぬ。」

「ワイももうそれでええわ、召喚獣でひとつ飛び、わーい……はあ。」

『……何となく非常識なことを言ったのだと分かりました。そんなに召喚獣は珍しいのですか。』

「手紙を運ぶんとかはけっこーおるんやけどな、といってもやつぱり少ないんやけど、人を運べるとなるとこらもう珍しいな。」

そんな、この世界では当たり前のことをまるで幼子のように不思議そうに聞いてくる二人に、ガリオスは前々から疑問に思っていたことを問いかけた。

「前から思っていたのだが、二人は記憶喪失か何かか？」

『それは、「そんなもんや、悪いけど、あまり深く突っ込まんといったって。」あ、リヤス。』

「そうか、すまない。」

『いえ、大丈夫です。言葉は通じますし、これからです。ラス、出来た？』

ラスは話が自分の興味が無さそうなものだったので途中で外に出て剣で大きな円を土に書いていた。

ラスが正式な召喚術の手順を踏んでみると前もって伝えてきたのでレイは二人を急かして荷物を纏め上げさせた。

ラスは巨大な魔法陣をスラスラと手馴れたように一寸のブレも無く完成に近づけていった。

レイとラスにしか見えていなかったが、この魔法陣を書く地面には不可視の、しかし二人には見える薄いラインが引かれていて、ラスはそれをなぞっているにすぎなかった。

しかし、書いているラスも、一瞥しただけのレイも、魔法陣に書かれているルーン文字の一つ一つの象徴が当たり前のように理解できた。

「……どういうことだ？」

魔法陣が完成した後もラスの思考は止まらない。

二人の脳裏に浮かび上がるは、まったく覚えた記憶の無い膨大な量の知識、いったいこれは何を意味しているのか、ラスには見当もつかなかった。

『グリフォンを喚ぶのか？』

いつの間にか仕度を整えたレイが隣に並び魔法陣を覗き込んでいた。あとは魔力を流し、詠唱するだけである。

「グリフォン！？またどえらいの喚ぶんやな、確かグリフォンを召喚獣にしとるんは北の国の竜騎士隊の隊長だけやで。」

「ああ、あの堅気な奴か、奴とは真面目すぎて話が合わぬゆえ、あまり好かぬ。」

「ガリオスが言うか、まあ、ワイもちよつと苦手やわ。
そう言えば、ガリオスの召喚獣は何なん？ワイは黒梟と銀鷹や。」

「ふむ、情報系だな、我は銀狼と白燕だ。
どちらもよく尽くしてくれている。」

やはり、ガリオスやリヤスほどの者になると複数の召喚獣を使役しているようだ。

ラスが召喚術の本格的なものを行おうと構えると、否応なしに辺りの空気は緊張し、圧力は高まっていった。

「我が汝の同胞を倒しし時、汝は我に膝を折り、血の盟約を結びぬ。
我の名はラースフル・ドリュウ・エンス・ハイエンド。汝が種族はグリフォン。」

「応え、我の声が聞こえしなら、応え、黄金を護りし知恵ある獣よ、
応え、血の盟約に従いて、此処に顕現せよ！」

学者の暴走を止める

セレナーデを召喚したときとは比にならないような魔力が満ち溢れ、魔法陣に刻まれているルーン文字を縁取ってゆき、終わりの方では一番魔力の少ないガリオスでは直視できずに、思わず手をかざしてしまうほどの眩い光を放っていた。

召喚術が完成したのか、一度ひと際強い光を放つと、魔法陣があった場所には二頭の獣が立っていた。

頭部と前肢、翼がワシで、胴体と後肢はライオンの姿をしていた。

グリフォンは主、ラスから肉の塊を与えられると美味しそうに食べ、手のひらに頭をすり寄せた。

「よお、グルー、フィン。久しぶり、元気そうだな。」

「ラス、まだ名前を変えてあげていなかったのか、可哀想だろう。」

実はラス、あまりネーミングセンスが無かったりする、セレナーデはレイ命名だ。ラスは当初ユニやペガとかというのにしようとしていた。

【よいのです、レイ様、我らもはや主の名づけに期待などしておりませぬゆえ。】

「え？ フィン、しゃべった？」

今までレイにすり寄って全身で好意を示していたフィン、グルーに

比べて若干身体の色が白い、がレイと目を合わせて話しかけてきた。

【はい、我らグリフオンのような高位の召喚獣は知恵無きものとは違いますゆえ、主やハイエルフのようなお方とは意思の疎通が可能です。

ただ、人とは声帯が違いますから、テレパシーのようなもので会話するため、その他との会話は難しいかと。】

「へえ、面白いな。ところでお前ら、何か変なことか感じなかったか。」

グルーとひとしきり戯れたラスがレイの傍に寄ってきた。

ガリオスとリヤスは興味深そうに二頭を見つめていた、特に学者気質のリヤスは今にもグリフオンに飛び掛りそうで、さり気なくガリオスが服を掴んで抑えていたがそれでも二頭を怯えさせていた。

【そうですね、召喚されてから気付いたことなのですが、繋がりが切れたとでも言いましょうか、そんな感じがします。】

【ソーソー、何て言うの？ 迷子っていうか、誘拐されたっていうか、引きずり込まれたともいうー。】

『誘拐？』

「ん？ 何や何や、誘拐やなんて物騒な、どないしたん？ グリフオンが何か言ったんか？」

「……それよりも、何故、グリフオンと会話出来るのかを尋ねるべきではないのだろうか？」

「いや、ワイ、高位の召喚獣とは会話出来るって知っとるし。」

「……………」

しれっとまるで常識やん、と言うように、グリフォンが会話出来ることを当たり前のようにリヤスは受け止めるが、普通は高位の召喚獣とあうことはないので啞然とするより仕方が無かったガリオスであった。

そんな自覚の無い非常識を放っておいて、ガリオスは強引に話を戻した。

「誘拐というのはどういうことだ穏やかではないぞ。」

『それが、繋がりが切れたとか、すみません、こちらは何がなんだか、整理できたらお話しますから。』

「む、分かった、今は黙しておこう。」

『ありがとうございます。』

「すまない、ガリオス。」

さすがにガリオスにまで異世界かパラレルワールドの話をする気はなかったのか、レイたちは話を濁した。

ガリオスもそのことを感じ取り深くは追及せず、口を閉ざした。するとその話の切れ目を見計らってリヤスが話に加わった。

「それより、ラス、グリフォンに触ってもええか？めちゃくちゃ気になるんやけど。」

「ん？ ああ、別にオレに聞かなくてもいいぜ。グルーは人懐っこいからな、触ってもいいってよ。」

それを聞いたリヤスは黒い方のグリフォン、グルーに近寄り、恐る恐る手を差し伸べた。グルーは自分からリヤスの手にすり寄って頭を撫でさせた。

リヤスが感じたグルーの手触りは、ふわふわとした内側の羽根と硬い外側の羽根が独特の感触を醸し出していた。事実、リヤスはその感触のとりことなり、うっとりと手を上から下へ滑らしていた。

《あるじいー、コレどうにかしてよお。》

三人と一頭が話を中断して見ると、コレ、と器用にグルーがクチバシで示したのは無心に羽根を撫で続けているリヤスの姿だった。

「今のは我にも理解できたぞ、どうにかしろと言ったのであろう。」

「当たり前だ、イタズラ好きのグルーを引かせるとは、学者モードは恐ろしいな。」

『学者モード、言い得て妙ですね。』

学者の性なのだろうか、先ほどまでは怖がっていたグリフォンにためらいも無く触り、羽根を眺めたり、口の中を覗き込んだりとしていた。グルーは嫌がりつつも、リヤスがグワシツと掴んでいるので逃げられそうになく、迷惑そうだ。

ラスとガリオスの二人がかりで引き離すと、ようやくリヤスは正気

に戻ってきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2946q/>

月の王の冒険

2011年7月17日06時45分発行